
紅の女神～二つの愛に生きて～

夢未

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅の女神〜二つの愛に生きて〜

【Nコード】

N1471V

【作者名】

夢未

【あらすじ】

アンジェリー又は宮廷画家を父に持つ下級貴族の娘。彼女の胸の狭間には小さな緑色の宝石が生まれつき埋まっていた。幼い頃から、親とまだ見ぬ未来の夫にだけしかそれを見せてはならないと父から教えられている。

ある日、アンジェリー又はお気に入り場所モンシエルジュリーの森へ風景画を描きに出かけた。今まで誰とも遭遇したことのないその森で、彼女は一人の軍神のような青年と出逢う。貴族の血を引くというアルフレードと名乗る青年。二人は出逢った瞬間に恋に落

ちていた。

この出逢いが、自分にだけ付いている宝石の正体を知るプロローグになるうとは……。

そしてもう一つの愛もまた生まれようとするのだった。

プロローグ

物心つく頃、父親から教えられたことがある。

「その胸にある物を絶対他人に見せてはいけぬ。言ってもいけぬ。絶対だ。いいな？」

「どうしてなの？」

「普通の人にはそんなもの付いていないからだ。知られてしまえばお前は人から異形の扱いを受けるだろう」

少女は胸の狭間に手を当て不安げに父親を見上げる。

「私……普通の人間じゃないの？」

「そんなはずはない！ お前は私達夫婦の実の子だ。それは間違いないのだ。……だが普通人は胸にそんな石を付けて産まれてくることはない」

少女は俯いた。

彼女の胸の狭間には生まれつき涙の粒ほどの大きさの深い緑色をした宝石が埋まっていた。

他人にはないものが自分には付いている。その事実を突きつけられ、少女はショックを受けずにはいられなかった。

どうして自分だけこんなものを持って生まれたのだろう。この石

さえなければ他人と何も変わらないのに。この先両親以外の人には知られずに暮らしていけるのだろうか。

「お父様とお母様以外の誰にも見せたり教えたりしちゃいけない……のね」

少女は自分を納得させるように呟いた。

父親は少し考えた後、口を開く。

「今はそうだ。……この先、お前が大人になって誰かを心の底から愛し、愛され、結婚する時、その未来の夫にだけは教えてあげなさい」

その言葉に、少女はたった一人許された、まだ見ぬ夫に思いを馳せるのだった。

(1)

「また行くのか？」

「ええ。多分今日くらいに完成すると思うから後で見せるわ。ちゃんと評価してね、お父様」

そう言い残し、少女は画材道具を荷台に乗せ、自ら馬車の手綱を取ると軽やかに駆け出していった。

少女の名はアンジェリーヌ・ラ・ブランシエス。歳は十五歳。

シルクのような細く真つ直ぐ腰まで伸びた髪は黄金色。見るものすべてに興味を抱くような好奇心を宿した瞳はエメラルドグリーンに輝いている。

アンジェリーヌの父ロドリグ・ラ・ブランシエスは、このアランテル王国の宮廷画家を勤めており、代々王家の肖像画を描いてきた一族だ。

それゆえ血筋からいえば平民出身なのだが、先祖が絵の才能を見初められて以来、彼らは男爵の称号を授かってきた。

貴族とはいえ元々は平民出身。生活は質素なものである。

父の血を濃く受け継いだアンジェリーヌもまた、絵の才能を持って生まれていた。

ブランシエス家には何人かロドリグの弟子がいるのだが、アンジ

エリー又はその誰にも勝る才能を持っていた。

ロドリグも最初はアンジェリー又と弟子の中の自分の後継者を結婚させようかと考えていたが、アンジェリー又の開花した才能に、彼女自身を自分の後継者へと考えるようになっていた。

当のアンジェリー又はそんな父の思惑を露とも知らず、今はただ描くことを楽しむ毎日を送っている。

今日もまた、彼女はお気に入りの場所……王宮からも貴族達の住む街からも程近いモンシエルジュリーの森の奥にある小さな湖へ足を運んでいた。

滅多に人の来ることがないその湖の静かに流れる時間を感じるのが、アンジェリー又は好きだった。

誰の目を気にすることもなく、その時の流れを描いてみたい。

アンジェリー又は木々の木漏れ日を体に受け、心を静めキャンパスに向かう。

絵はすでにほぼ完成している。後は細かな調整をするだけだった。

アンジェリー又は風景画を描くのが一番好きだった。

もちろん肖像画や静物画も描くし、その完成度は代々ブランシエス家を築いてきた画家達に勝るとも劣らない腕前である。

それでも静物画や肖像画にとらわれず風景画を好むのは、一瞬一瞬自然が色や形を変えていくからだった。

その変わりゆく様を描き留めることが出来たら。

アンジェリー又はいつか自然の持つ光や動きすら感じさせられる絵を描いてみたいと思っていたのだった。

アンジェリー又は絵筆を置いた。

(完成……だわ)

安堵した満足げな笑みが零れる。

今までで一番の出来と言っていていいほどのものが描けた。

だがアンジェリー又は更に高みへと目を向ける。

次はもっと素晴らしい絵を、と。

アンジェリー又は椅子から立ち上がり、傍の地面へ直に座りくつろぐ。

その時、馬の蹄の音とともに嘶きが遠くの方から聞こえてきた。

反射的にアンジェリー又は音のした方向に目を向ける。

(……誰?)

もう何度もこの場所へ来ているが、人と会ったことなど一度たりともない。

自分の他にここへ来る者がいたことを初めて知ったくらいだ。

アンジェリー又は少し警戒心を抱いてじっと見つめる。

すると黒馬が一頭対岸に現れた。

馬上には男が一人、馬の首筋を誉めるように撫でている。

アンジェリー又は彼を目にした瞬間、その姿から目を逸らすことが出来なくなっていた。

(まるで軍神が地上に降臨してきたよう……)

神々しく凛々しい姿。

彼を描くなら、その線は力強く太いものが相應しい。

あまりにじっと見つめていたからか、視線を感じた男がアンジェリー又に目を向けた。

(あ、……気づ……いた)

それでもアンジェリー又は彼を見てしまっ。

彼の瞳から放たれる力がアンジェリー又を惹き付ける。

(私どうしてしまったの？ 目が……離せない)

男の方もしばらくアンジェリー又を見つめていたが、背筋を伸ばし手綱を持ちなおすと馬を走らせ始めた。

(こっちに来る!?)

まぎれもなく男はアンジェリーヌに向かって来ていた。

アンジェリーヌは逃げようとは思わなかった。

誰かなんて何も分からない。

ただ惹き付けられてしまう。

胸が高鳴ってしまふ。

男はアンジェリーヌの目の前まで来て馬上より舞い降りた。

彼もまたアンジェリーヌから目を離すことなく、座り込んでいた彼女に視線を合わせるよう片膝をつく。

アンジェリーヌは息をするのも忘れてしまっただった。

右目が灰色、左目が琥珀色の双眸は人を従えるような逞しい光を放ち、少し癖のある肩にかかるかどうかの栗色の髪が風になびき頬に触れると艶やかな雰囲気を醸し出す。

「娘、名は？」

男の低くだがよく通る声に、アンジェリーヌは我に返ったように口を開く。

「ア、アンジェリーヌ。アンジェリーヌ・ラ・ブランシェス」

「ブランシエス？」

男はすぐ傍のキャンパスを見て、納得した顔で再びアンジェリーヌを見た。

「ブランシエス男爵の娘……か。父親に似て絵の腕前は相当なものだな」

男は立ち上がり、絵と真っ直ぐ向き合いじっと見つめる。

「いい絵だな。本当に日の光が降り注いでいるようで暖かな温もりを感じる。お前の心もきつとそうなんだろうな」

真剣な眼差しで絵を見つめ言った男の言葉がアンジェリーヌには嬉しかった。

彼の眼差しを見た時直感した。この人はお世辞を言う人ではないと。そして絵を見る目は確かだと。

ブランシエスという名と絵だけで、ロドリグの娘と見抜いたのだから。

「父を……ロドリグを知っているってことはあなたも貴族なの？」

言った後すぐ、間抜けなことを聞いてしまったと思った。

男の身なりを見れば平民でないことは一目瞭然。

上質な布で作られた服。袖口や裾を彩る品のある刺繍。細工を施

したボタン。

どれをとっても名ばかりの貴族のアンジェリーヌが身に着けたことのないものばかりだった。

男はアンジェリーヌに再び近づき、彼女の横に腰を降ろした。

アンジェリーヌと顔を見合わせた男は涼しげに笑った。

「俺はアルフレード」

「アルフレード？ この国の人ではないの？」

アンジェリーヌは不思議そうに言葉を返した。

アランテルではあまり聞かない名前だからだ。アランテルでは一般的にアルフレードではなくアルフレッドと呼ばれている。

「隣国のリジエーロ人とのハーフだ。親はリジエーロの子爵の血筋だから、俺も貴族の血を引いているってわけだ」

「……そうなの。歳はいくつなの？ 私は十五歳よ」

「俺の方が三つ上だな」

話をしているうちに、自然とアンジェリーヌにも笑みが浮かぶ。

初めはその存在感に圧倒されたが、アルフレードの気取らない、自分のことを「俺」と呼ぶ砕けた態度に親しみ易さを感じていた。

「ここへはよく来るの？」

「たまに、だよ。……ここに来ると日頃の煩わしいことを束の間でも忘れていられるんだ。素直な自分に戻れるっていうか落ち着けるっていうか……。俺の一番お気に入りの場所さ」

そう言うとアルフレードはごろりと仰向きに寝転がった。

初対面でここまで気を許しているアルフレードに、アンジェリー
又もまた彼に対して素の自分を見せていた。

「私もここが一番好きな場所なの。モンシエルジュリーの入り口までなら昔からよく来ていたけど、こんな奥まで入ったのは何かいい風景がないかと思つて……。アルフレードはここ、どうやって知つたの？」

アンジェリー又は寝転がっているアルフレードの顔を見下ろした。

「……日常の束縛から解放されたくて逃げ出した先に辿り着いたのさ」

アンジェリー又は不思議そうにアルフレードを見つめる。

彼の言葉が冗談なのか本気なのか判断がつかなかったからだ。

「アルフレードの家って厳しい家柄なの？ 私の家は貴族と違っても名ばかりだからわりと放任主義なの。だから本当の貴族ってどんな生活しているのかいまいち分からなくて……」

「ん……厳しい方なのかもな。でもここへ来るのは逃げ出したいか

らばかりじゃない。初めはそうでも今はただこの場所が好きだから来たりもしてるしね」

アルフレードの明るい口調に、アンジェリーヌにも笑みが戻る。

(この人意外と苦労してるのね。でもそんなこと微塵も感じさせないなんて強い人)

二人はしばらく取りとめもない会話をした。

その中で二人は互いに好意を寄せ始めていた。

「俺そろそろ戻らないと」

会話が一区切りした時、アルフレードがそう言って立ち上がった。

アンジェリーヌもつられて立ち上がる。

彼女の胸に切なさがよぎった。

(もう逢えないのかしら)

アルフレードは黒馬に騎乗する。

切なげに傍で見上げるアンジェリーヌに、アルフレードは優しく微笑んだ。

「またここで逢いたい。今度はいつ来るんだ？」

彼も同じ思いだったことを知り、アンジェリーヌの表情が明るく

なる。

「天気の良い日ならいつでも来られるわ!」

「では次の晴れた日の午後、ここで逢おう。アンジェリーヌ、必ずまた逢おう!」

アルフレードは力強い言葉を残し、黒馬とともに森の中へ姿を消した。

アンジェリーヌは姿が見えなくなってもしばらくそのまま見つめていた。

アルフレードの残した「逢おう」という言葉を何度も胸で噛み締めながら……。

(2)

それからというもの二人は互いの都合のいい日があると、決まってモンシエルジュリーの森の湖のほとりで逢っていた。

いつも束の間の短い時間でしかないが、そのひとときを過ごすことを二人は心待ちにしていた。

もう改めて想いを口にするまでもなく、惹かれ合っていることを互いが感じ取っていた。

アンジェリー又は今まで湖へ来るのは絵を描くのが第一の目的だった。

しかし今では絵を描くためというより、アルフレードに逢うために変わっていた。

絵を描いていないわけではない。

アルフレードに逢う前と逢った後、絵は描いている。

だが以前よりは描き上げるペースが落ちていた。

ロドリグもアンジェリーヌの異変に絵を通してそれとなく察していた。

以前のアンジェリーヌの絵とは違う、感情がさらに豊かになった絵。

異性を愛しその思いがほとばしるような、見るものの胸にすら誰かを愛したいと思わせる。それが今のアンジェリーヌの絵である。

アンジェリーヌはいつしか胸の石のことをアルフレードになら話してもいいと思うようになっていた。そしてロドリグも娘の前にその存在が現れたことを漠然と感じ取っていた。

今日もアンジェリーヌとアルフレードは湖で逢っていた。

もう何も相手に気を遣う必要のない二人は、木漏れ日を浴びながらひとときの時間がもたらす幸福に身を委ねていた。

アルフレードはアンジェリーヌの膝枕で寝息をたてて昼寝をしている。

休息中の軍神の眠りを守るように、アンジェリーヌは満ち足りた顔をして眠る彼の表情を見つめていた。

何をするわけでもない。ただアルフレードがここにいてくれる。それだけでアンジェリーヌは幸せになれた。

「……………んっ」

アルフレードが目を覚まそうとしている。

アンジェリーヌはそっと彼の髪を撫でた。

瞳を開けたアルフレードは、何度か瞬きをした後アンジェリーヌを見つめ、胸を撫で下ろしたように笑った。

「いつの間にか眠ってたんだな」

「おはよう。……時間、まだよかった？」

「ああ。今日は夜に用があるくらいだから」

「よかった」

アンジェリーヌは安心して息を吐いた。

あまりに気持ちよさそうに眠っているアルフレードを無理に起こすのは忍びなかった。

しかしもし何か用事があったとしたら、彼は寝過ごしたことになるってしまう。

アンジェリーヌはそれを心配していたのだ。

「アンジェリーヌ」

アンジェリーヌを見つめていたアルフレードが不意に彼女の名を呼んだ。

呼びかけに応じアンジェリーヌが声を出そうとした時、アルフレードの片手が彼女の首筋に伸びてきた。と同時にアルフレードが身を起こし、アンジェリーヌの頭を後頭部から引き寄せた。

アルフレードの唇がアンジェリーヌのそれに優しく触れる。

一瞬の出来事にアンジェリーヌはされるがまま、ただ目を見開く

ばかりだった。

アルフレードは完全に体を起こすと、驚いて固まっているアンジェリーヌの頬にそつと触れた。

「初めて……だったんだな。キスの時は目を閉じるもんだぜ」

初々しい反応を返してきたアンジェリーヌに、アルフレードはさらに愛しさを募らせた。

アンジェリーヌは気恥ずかしさから俯きそうになる。

「アンジェリーヌ、……俺を見て」

アルフレードの囁きかけてくる声に、アンジェリーヌは抵抗する術もなく言われるがままに彼を見つめた。

泣きそうになるくらい、アンジェリーヌの胸の内はアルフレードへの想いで溢れていた。

アルフレードがアンジェリーヌの肩を引き寄せる。

思わず体を固めるアンジェリーヌの緊張を解すように、アルフレードが彼女の額や脛に優しく口付けていく。

アンジェリーヌは次にアルフレードと目を合わせた時、自然と瞳を閉じた。

それに応えアルフレードはもう一度、今度は想いを確かめ合うかのように長い口付けをした。

二人は思った。

ずっと二人の生がある限り、永遠にこの想いは、この幸福は終わりはしない……と。

* * *

「アンジェリーヌ、出掛けるから準備しなさい。きちんと正装するのだぞ」

朝食後、ロドリグが言った。

「正装？ どこに出掛けるの？」

「一応貴族なのだから舞踏会や祝宴に出席できるようなドレスは、身だしなみ程度には持っている。」

だがこの前袖を通したのは一体何ヶ月前のことだろうか。

アンジェリーヌにはそれほど縁のない服装だ。

「宮殿だ。仕事の依頼があって呼ばれたんだよ」

「でもどうして私なもの？ いつもお父様一人か一緒に行くのは弟子の人達でしょう？」

「……アンジェリーヌ、私はお前を後継ぎに思っている。だからこれからはお前を連れて行く」

ロドリグの言葉に、アンジェリー又は一瞬彼の言葉の意味を理解できなかった。

分かったと同時に事の重大さにも気づく。

「何を言ってるの、お父様！ お父様には何人もお弟子さんがいるじゃない。それなのに何故私なの？ 私は女よ。家を継ぐのは普通男の人はずでしょう!？」

ロドリグは厳しい瞳でアンジェリーヌを見つめた。

「性別も血筋も関係ない。私はただお前の絵の才能を認めただから後継者にしたいのだ」

ロドリグの決意を知ったアンジェリーヌには、戸惑う気持ちの方が大きかった。

父親に自分の絵を認めてもらえたのは嬉しい。だがブランシエス家の後継者になる責任の重さを突き付けられ、それを簡単に受け入れられずにいた。

女の自分には無縁と思っていたブランシエス家の後継ぎ問題。

代々王家の肖像画を手懸けてきたその重圧を、アンジェリーヌは今初めて感じた気がした。

「私がブランシエス家を……継ぐの?」

アンジェリーヌは半信半疑の呟きを漏らした。

「アンジェリーヌ、今すぐ自覚を持ってというのは無理なことだろう。これから少しずつ私の傍で学んでいきなさい。宮殿へ行くのも一つの勉強だ。あそこにはいくつも我が一族が描いてきた絵が残されている。それを見ることもお前のためになるだろう」

一族の築いてきたものの重さがロドリグの言葉からヒシヒシと伝わってきた。

アンジェリーヌはもはや後継者という道から反れるのを許されなくなつたことを、漠然と感じ取ることでは精一杯だった。

* * *

アンジェリーヌはホツと息を吐き、緊張の糸を解す。

今は宮殿の中心部、王宮の中にいる。

つい先程アンジェリーヌは生まれて初めてアランテルの国王、エドワール四世と対面したばかりだ。

ロドリグはエドワール四世から直々に絵を依頼された。

離宮を一軒建てたが、その中を彩る絵画を頼まれたのだ。

ロドリグは丁重に引き受けるとともに、自分の後継者としてアンジェリーヌをエドワール四世に紹介した。

ロドリグが娘を後継者に選んだと知ったエドワール四世は、ロドリグが娘可愛さで後継者にするような人物ではないということは分かっていた。

仕事熱心で厳しいロドリグが選んだ者なら間違いはないはずと確信があったから、エドワール四世はあえて何も反対しなかった。

アンジェリーヌの方はただ国王の威厳の畏れ多さに無言で父の後ろに控えているのがやっとだった。

ロドリグとエドワール四世の会話も覚えていないほどアンジェリーヌは緊張してしまっていたのだ。

謁見の間を出てやっとその緊張も徐々に治まっていく。

ロドリグは宮殿へ来た機会にアンジェリーヌに宮廷内を案内する。

天井を彩る絵も昔ブランシエス家が手懸けたものだと言われ、ロドリグは教える。

代々王家の肖像画は当代を除いては肖像画の間に入れられて見ることが叶わなかったが、宮廷のあちこちに飾られていた絵画はアンジェリーヌにも感嘆の溜息をつかせた。

そして改めて宮廷画家として存在してきたブランシエス家の重みを感じずにはいられなかった。

(本当に私が……引き継ぐの? ……継げるの?)

今のアンジェリーヌにはその自信などあるはずもなかった。

アンジェリーヌはロドリグの後ろをついて歩きながら、先祖の描いた数々の絵に圧倒されるばかりだった。

ふとロドリグが急に立ち止まった。

それに気づいたアンジェリーヌもロドリグにぶつかるとの一手手前で止まる。

ロドリグは前から歩いてくる人物に道を譲るようにして脇にずれ、丁寧に敬意を込めて頭を下げた。

それを見たアンジェリーヌもロドリグと同じようにお辞儀しようとした時、その前からやってきた人物を見て思わず声を上げる。

「アルフレード！？ どうしてここに？」

いつもモンシエルジュリーの森で逢う彼と思わぬところで再会しアンジェリーヌは驚いた。

「アンジェリーヌ、控えなさい！ 王族にむやみに私達の方から声を掛けることは礼儀に反するのだぞ」

「王……族？」

「そうだ。それにこの方はアルフレードという名ではない。この方はリュシアン王太子殿下だ」

ロドリグに叱咤されアンジェリーヌは茫然となる。

(アルフレードが王族？ ……王太子殿下？)

アンジェリーヌの頭の中は混乱していた。

「ブランシェス男爵、もうよい」

リュシアンはロドリグを宥めるとアンジェリーヌをじっと見つめてきた。

彼を思わず見つめ返したアンジェリーヌはあることに気づく。

額飾りに振りかかる栗色の髪はアルフレードと同じ色だが、彼はアルフレードのくせのある髪と違い真っ直ぐで幾分アルフレードより長かった。

そしてはつきりした違いは瞳の色。

アルフレードは右が灰色、左が琥珀色だった。だが今この目の前にいる者の瞳は右が琥珀色、左が灰色だったのだ。

醸し出す雰囲気は、軍神と思ったアルフレードに対して、この者はすべてを統べる全能神の神々しさを放っていた。

(アルフレードじゃ……ない)

顔の創り・姿はアルフレードそのものなのに、よく見ると別人だったのだ。

「アンジェリーヌと申したな」

リュシアンは茫然と立ち尽くしているアンジェリーヌに声を掛けた。

「私はこの国の王太子、リュシアン・ジュリオ・デュ・シャルロ・サンプルランだ」

「は、はい。失礼しました。人違いをしてしまいました」

アンジェリー又は声を掛けられ、我に振り返り頭を下げた。

「いや、……あながち人違いではないのだよ」

リュシアンの優しい言葉にアンジェリー又は思わずまたリュシアンを直視する。

言葉の意味が理解できずにいるアンジェリー又は諭すように、リュシアンは穏やかに彼女を見た。

「アルフレードは私の双子の弟なのだよ」

「双子の……弟？」

「そう」

アンジェリー又は消化しきれない頭の中で色々考える。

アランテル王国には三人の王子がいる。その一人目と二人目が双子。それは国民なら誰でも知っていることだ。

だがアンジェリー又はその名を王太子がリュシアン、第二王子がジャンと聞いていた。

アルフレードという名ではない。

「でもアルフレードはリジェーロ王国の子爵の血筋と言っていました。王族など一言も……」

信じられない思いでアンジェリー又は呟いた。

「私達の母はリジェーロの子爵の娘だったそうだよ。私達が三歳の時病死してしまって、母の記憶はほとんどないけれどね。アルフレードの本当の名はジャン。ジャン・アルフレード・ドウ・サンルブラン。私のジュリオという名もジャンのアルフレードという名も、母方のリジェーロ人としての名前だよ」

リュシアンは告白に、アンジェリー又は腰が抜けるようにしてその場に座り込んでしまった。

(アルフレードの名はジャン。ジャン・アルフレード・ドウ・サンルブラン。……この国の第二王子)

今まで普通に逢い話し、そして恋をした相手が雲の上の人物だと突き付けられ、アンジェリー又は自分の想いの持っていく場所を失い、闇の中にさ迷ってしまった気がした。

リュシアンはアンジェリー又は手を差し伸べ、シヨックを隠しきれない彼女を力づけるように見つめる。

「弟はきつとそなたと対等でいたかったのだろう。もし本当の身分を明かせば、そなたはきつと逢ってくれなくなる。そう思ったからそなたには素性を隠したのだと私は思っている。弟はそうまでしてそなたに逢いたかった。……弟は私と違ってまだ自由のある身。そなたのこともきつと悪いようにはしないはずだよ。弟の真っ直ぐ

な気性がきつと身分の差を何とかしてくれるから。だからそなたも弟が王族だからもう逢えないなどと思わないで欲しい」

リュシアンは励ます言葉は嬉しかった。

だが今まで通り何もなかったかのようにアルフレード、いやジャンに逢えるはずはなかった。

自分は貴族といえど貴族の中でも最下級。

ジャンは貴族の上の王族。

身分を忘れて逢えるわけがない。

リュシアンは落胆の色を隠しきれないアンジェリーヌに心残りな思いを抱いたまま去って行った。

（澄んだ真つ直ぐな瞳をしたい娘だったな。あの娘はきつと翼を広げてどんな所へも飛び立って行ける子だろう）

リュシアンは胸の中で呟いた。

自分は王太子という名の籠の中の鳥。アンジェリーヌの持つ翼がリュシアンには羨ましかった。

出逢った瞬間に自分を真つ直ぐ見つめてきた少女。彼女の持つ内に秘めた可能性が、リュシアンの瞳には眩しく映ったのだった。

(3)

モンシエルジュリーの森の湖には小さな滝がある。

三メートル程の低い段差から降り注いでくる水は水浴びをするには調度よいものだ。

アルフレード、いやジャンは時々そこで水浴びをする。今日も彼はそこにいた。

「アンジェリーヌ、今日は遅かったな」

アンジェリーヌが来たことに気づいたジャンは、彼女に向かって片手を上げ自分の居場所を知らせる。

アンジェリーヌも手を上げそれに応えた。

だがいつもの元気はなかった。

遅くなったのは別に用事があったからではない。行くかどうか直前まで迷い続けていたからだだった。

『王族だからもう逢えないなどと思わないで欲しい』

リュシアンという言葉は何度も繰り返し思い浮かべた。

しかしアンジェリーヌにとって王族は別世界の存在。

逢えるわけがない。もう逢わない方が互いのためだと何度も思っ

た。

それでも森へ来たのは、もしかしたら人違いかもしれないと思っ
たからだ。

リュシアンのお話を信じていないわけではない。万が一という一縷
の望みを捨て切れなかったのだ。

アンジェリー又はほとりからジャンを見つめる。

彼のいつもと変わらない様子からすると、恐らくリュシアンから
話は聞いていないのだろう。

(アルフレードが本当の名前だったら……。ジャンという名ではな
かったら……。王族ではなかったら……)

アンジェリー又はもしかしたらという僅かな期待を抱く。

でもどう確かめたらいいのか分からない。

直接聞く勇氣もない

面と向かって肯定されるのが怖かった。

アンジェリー又は傍に脱ぎ捨てられてあるジャンの服を手に取り、
そつとたたみ始める。

上質な服。王族ならば当たり前前の衣装。

(……間違いであって欲しい)

王族でない証拠を探そうとするたび、それを肯定する物ばかりが目についてしまう。

アンジェリー又は剣を手にした。

彼がいつも持ち歩いている物だ。

鞘の細工もアンジェリーが今まで目にしたもののどれよりも細かく丁寧な物である。かなり腕の立つ細工師の手によるものなのだろう。

アンジェリー又は深呼吸した後、目を閉じ、震える手で剣をそつと鞘から抜く。

アンジェリー又は剣のあることに気づいた。

貴族が持ち歩いている自分専用の剣には、通常剣身の付け根の金属部分に家紋が彫られているのだ。

アンジェリー又は祈る気持ちで目を開けた。

(……………っ！)

アンジェリー又は言葉を失った。

彫られていたのは鷹に二本の剣が組み合わさった紋章。

王家の紋章だった。

「アンジェリーヌ、どうした？」

ジャンが湖から上がってアンジェリーヌに声を掛けた。

一縷の望みを打ち砕かれたアンジェリーヌにはジャンの声が届いていなかった。

アンジェリーヌはもはや疑う余地のない現実に愕然としてしまっていた。

彼女の座っている足元には、鞘から抜けかかったジャンの剣が転がっている。

ジャンはアンジェリーヌの様子が気になりながらも、手早く服を着た。

「アンジェリーヌ？」

ジャンは身動き一つしない彼女の肩に手を掛け呼びかけるが、やはり反応がない。

ジャンの目に剣が映る。

抜けかかった剣に見える王家の紋章。

ジャンはようやくアンジェリーヌが何を知り動けなくなってしまったのかを悟った。

ジャンは剣を拾い、自分の腰に挿す。

アンジェリー又は自分の視界から消えた剣を探すように視線を動かすと、神妙な面持ちで立っているジャンと目が合った。

「ジャン……殿……下」

恋をしてはいけない相手。

実るはずのない恋の相手。

(もう逢ってはいけない！)

アンジェリー又は胸に痛みを抱えたまま、ジャンの前から逃げ出すように走り出した。

「アンジェリー又……！」

急に逃げ去ろうとした彼女に、ジャンは叫び追いかける。

男性の、しかも軍神のようなジャンの足に叶うはずもなく、アンジェリー又はすぐさま追いつかれてしまう。

ジャンはアンジェリー又の片方の二の腕を掴んで引き寄せた。

アンジェリー又は嫌がおうでもジャンの方を向いてしまい、引かれた勢いでそのまま彼の胸に飛び込む形になってしまった。

アンジェリー又はすぐさま身を起こし逃げようとするが、その前に素早くジャンの腕によって抱き締められてしまった。

「は、離して下さい……！」

アンジェリーヌは取り乱れていた。

心に強く残るジャンへの想い。決して実るはずのない恋。

その苦しみから逃れたいのに、こうして引き止められてしまう。

アンジェリーヌの瞳からは涙がいく粒も零れ落ちていた。

「離し……て……下……さい」

アンジェリーヌはジャンの胸の中で泣き崩れた。

ジャンはアンジェリーヌを抱いたまま、その場に座り込む。

「私のことは……忘れてください。……今までのこと……なかったことに……して……下さい」

アンジェリーヌの弱々しい涙声に、ジャンは彼女を抱く腕にさらに力を込める。

「俺は一人の人間としてお前を愛した。それだけだ」

「でも身分が違いすぎます。あなたは王族。私は……私……は……」

アンジェリーヌはジャンの顔を見ることが出来なかった。

「俺に畏まらなくていい。身分なんて気にする必要はない。どのみち俺の血筋は次の代には王族を離れ公爵になるんだしな」

確かに王を継がなかった王子の子供は王族ではなく貴族の公爵を名乗ることになるのが仕来り。

「でも今のあなたは紛れもなくこの国の第二王子。もし万が一王子殿下に何かあった時はあなたが王位を継ぐ宿命。そのような方もうお逢いしていいはずがありません」

「アンジェリーヌ、俺に敬語を使うな」

ジャンは決して自分の顔を見ようとしないアンジェリーヌの髪に顔を埋めた。

「俺は確かに第二王子だが王位継承順位は三番目。まず王位が回ってくることはない」

「なぜ三番目なのです？ 第二王子なのに……」

「まあ聞け。……俺と兄のリュシアン之母は正妻ではなく愛人だったんだ。正妻の子は第三王子のカミーユただ一人。本当は血筋からいってカミーユが王太子なんだが、とある理由で長男が王太子ってことになっている。血筋はどうでもね。……で次からは歳よりも血筋で順番が決まるってわけさ」

それでも王子であることには変わらない。

アンジェリーヌはジャンの話聞いてもなお、もう逢うべきではないという思いを翻さなかった。

(あの頃に戻りたい。ただ毎日絵を描いて過ごしていた出逢う前の日々……戻りたい)

ジャンと出逢う前、恋をする前に時が戻って欲しい。

アンジェリーヌはジャンの胸の中で声を押し殺すようにして再び泣き始めた。

(この恋を忘れるにはどうしたらいいの?)

なす術のない胸の苦しみに、アンジェリーヌはただ涙を流すしかなかった。

「……アンジェリーヌ」

ジャンは腕を解くと、アンジェリーヌの頬を両手で包み強引に自分の方へ向けた。

アンジェリーヌは彼の放つ瞳の力に逃れる術を失って見つめるしかなかった。

「俺はたとえお前が平民でも敵国の者だとしてもお前を愛し続ける。俺の一生を懸けて愛し抜く。……お前に聞きたい。王族や貴族の身分は考えずに一人の男としての俺をどう思っている？ きちんとお前の本心を聞かせてくれ！」

アンジェリーヌを真っ直ぐに貫くジャンの瞳。

その瞳に魅入られたアンジェリーヌの瞳からは涙が溢れ頬を伝って流れ落ちていった。

真剣なジャンの瞳の前に、どうして彼への想いを隠すことができ

よじ。

「愛……して……います」

アンジェリーヌが震えながらも言葉にしたのは、紛れもない彼女の心だった。

アンジェリーヌは嘘を口にする事が出来なかった。

もう後のことなど何も考えられなかった。

ジャンを一人の男性として愛している。

ただその真実があるだけ。

ジャンはやっとアンジェリーヌが心を開いてくれたことに安堵したように笑みを浮かべそつと彼女に接吻した。

「その一言が聞きたかった。その一言があればもう恐れるものなど何もない」

ジャンはアンジェリーヌを抱き締め、はつきり告げた。

これでよかったのかどうかアンジェリーヌには分からない。ただ自分にもそしてジャンに対しても想いを偽ることが出来なかった。

アンジェリーヌはしばらくジャンの温もりに浸っていた。

「アンジェリーヌ」

彼女の耳元でジャンは彼女の名を愛しそうに囁いた。

「結婚しよう」

ジャンの思いがけない一言に、アンジェリー又は驚いて預けていた体を起こした。

「何て顔をしているんだ。意外なことでもないだろう？」

「いくらなんでも無理……」

「無理ではないさ」

あまりに堂々としているジャンに、アンジェリー又は戸惑いを隠しきれない。

愛している。

愛されている。

それだけでアンジェリー又は充分だった。身分を考えれば充分過ぎるほどだった。

この先たとえ愛人という存在になっても構わない。ジャンが愛してさえくれれば他に何も望まない。

ジャンの想いを受け入れたアンジェリー又は漠然とだがそう思っていた。

アンジェリー又は俯いた。

「無理よ。……公に結婚するなんて、そんなこと国が許すはずないわ」

「俺が国王を説得する。もしどうしても許しをもらえないようなら、俺が王家を出す」

ジャンのとんでもない決意に、アンジェリー又は彼を凝視する。

よもやジャンが王家を捨てようとしているとは思ってもみなかった。

(そんなこと、させられないわ)

「私のために王家を出るだなんて、そんなことしないで。私は今のままで充分幸せだから」

思い留まらせようと縋るように見つめてくるアンジェリー又にも、ジャンは首を横に振る。

「俺がお前を妻にしたいんだ。お前と結婚できないようなら、他の誰とも結婚しない。一生一人身の方がマシだ。お前と一緒になれないのなら王家に何の未練もないさ」

「ジャン……殿下」

アンジェリー又はジャンの決意に胸を打たれ眩いた。

ジャンが苦笑する。

「殿下はやめてくれ。ジャンでいい」

「でもあなたは王子……」

「身分のことは口にするな。お前の前では一人の男でいさせてくれ」

アンジェリー又は真つ直ぐに想いをぶつけてくるジャンに、自分も同じように応えていきたいと思い始めていた。

このまますんなり事が進むはずがない。だがジャンだけでなく、彼と一緒にあって自分も困難に立ち向かって行こうとアンジェリー又は思うようになっていた。

「アンジェリーヌ、もう一度改めて申し込む。俺の妻になって欲しい」

ジャンの再度のプロポーズに、アンジェリー又は今度は深く頷いた。

「はい、ジャン。私のただ一人の……夫」

(4)

「父上、お話したいことがあります。後で私室に伺うので時間を空けて頂けますか？」

「ジャンどうした？ 改まって」

夕食後、エドワール四世が退出しようとした時、ジャンが声を掛けた。

エドワール四世はいつもに増して丁寧なものの言い方をしてきたジャンを不思議に思った。

「大切な話があります」

「……分かった。私室で待っていてよう」

ジャンの真剣さに、その話がジャンにとって重大なことと察したエドワール四世はジャンに待つと言い残り私室に向かった。

ジャンは気を落ち着かせるようにふっと一息吐く。

そうしている間に、王妃や第三王子カミーユも退席して行った。

ジャンは覚悟を決め、席から立ち上がった。

「ジャン」

近寄って来たリュシアンが後ろからジャンの肩に手を置き呼び掛

けてきた。

「私も同席していいかな？」

「兄上？」

リュシアンがついて来ると言ってきたのが何故か分からないジャンは、不思議そうにリュシアンを見た。

リュシアンはそんなジャンを見透かすように笑う。

「ブランシエス男爵の娘、アンジェリーヌとの事を認めてもらいに行くのだろうか？」

今のジャンにこれ以上大切な話などありはしない。

リュシアンにはジャンの大切な話が何を指すかすぐに分かったのだった。

ジャンは益々驚きの目でリュシアンを見る。

「何故兄上がアンジェリーヌのことを知っているんだ？ 俺はまだ誰にも彼女との付き合いを話していないのに……」

「私は一度宮廷で彼女に逢ったことがあるのだよ。彼女は父の伴で来ていたようだが、私を見てアルフレードと声を掛けてきた。その時私はお前の身の上を話したのだが、かなりシヨックを受けたらしい。けれどお前のことだから、身分の差で彼女を諦めたりはしないと思ってたよ。おまえが行動に出たということは、彼女も分かってくれたということ……だね？」

リュシアンのお話を聞いて、ジャンはふと気づいた。

(そういえばアンジェリーヌは王家の紋章だけで俺をジャン、第二王子だと言ってきた。紋章だけなら普通俺が王族の何者かすぐには分からないはず。……そういうことだったのか)

あの日、アンジェリーヌは第二王子と知っていて、初めから別れを告げる覚悟で逢いに来たのかもしれない。

ジャンの胸にあの日のアンジェリーヌの涙に濡れた悲痛な顔が浮かんだ。

「俺は彼女を幸せにしたい。それが俺の幸せになるんだ。彼女にも辛い思いをさせるのはまっぴらごめんだ。俺は俺の出来る限りの力で彼女を守っていく」

「私も応援するよ。……いい子を選んだよ、お前は。澄んだ、輝いた瞳をした娘だったな。……大切にするのだよ」

リュシアンはたった一度逢っただけのアンジェリーヌの姿を思い浮かべジャンに言った。

胸にほのかに抱く彼女への想いを、リュシアンは永久に封印しようとしていた。

親愛なる弟と、彼を愛するアンジェリーヌの幸せのために。

「ありがとう、兄上」

リュシアンの上に気づいていないジャンは、心強い援軍を得た思いで感謝したのだった。

二人はその足でエドワール四世の私室へ向かった。

私室にはエドワール四世だけだった。召使も臣下の者も誰もいない。

広い王宮の中でも唯一の王のプライベートルーム。国務から解放が許される空間。

そこに入室を許されているのは、王家のエドワール四世の家族だけである。

エドワール四世はジャンを待ち構えていたかのようにすでにテーブルについていた。

「リュシアンも一緒か？」

「ええ。ジャンの話はきつと私も無関係ではないはずなので……」

リュシアンはジャンの後に続くようにして椅子に腰掛けた。

二人はエドワール四世と正面から向き合う形で座った。

「で、話とは何だ？」

エドワール四世に言われ、ジャンは彼に挑戦的な瞳を向けた。

「父上に紹介したい娘がいます。俺の妻になる人として……」

ジャンから切り出された突然の結婚話にエドワール四世は正直驚いた。

今のところ三人の王子は未婚だった。

もう三人とも結婚話が出てもおかしくはない年齢だ。だが三人の中で一番その手のことには縁遠そうに思えたジャンからこの話が出るとは、エドワール四世は思ってもいなかった。

しかも臣下からの薦めの縁談ではない。本人から直接……だ。

「相手はどここの娘だ。他国の王族か？ それとも公爵の娘か？」

王族の結婚する相手は大体にしてその二つに限られていた。

「いえ。男爵の娘です」

「男爵だと！？」

「はい。ブランシエス家の娘、アンジェリーヌです」

「何を馬鹿げたことを言っているのだ！」

エドワール四世は声を荒げた。

王族が男爵の娘と結婚など、相手として問題外なことだった。

ジャンは怯まなかった。

エドワール四世のこの反応は予想していた。

身分の差があるからこそ、アンジェリーヌも一度は別れようとしたのだ。

国を統べる者としては当然の反応だと思った。

「俺は馬鹿な事を言っているとは思っていません。俺はアンジェリーヌを愛した。彼女もそれに応えてくれた。俺は身分ばかりを重んじるような愛のない結婚などしたくない」

エドワール四世の頭の中におぼろげにロドリグが後継者にと紹介した娘の姿が浮かんだ。

「ブランシエス男爵は娘を後継者にしたはずだ。なのに何故お前と結婚しようとしているのだ？ 王家の権力、地位に魅力を感じたのではないか!？」

「彼女を侮辱しないで下さい!」

ジャンの声に耳も貸さずエドワール四世は続ける。

「それにジャン、王家に必要なのは愛のある結婚ではない。より王家を国家を安泰に導く縁談だ。お前も王族に生まれたからには、国家のために身を捧げなければならない立場だということを忘れてはならない!」

王子としての立場。

幼き頃からその心得は学ばされてきた。国家のためになることを

するように教えられてきた。

でも出逢ってしまったのだ。

己の何もかもを捨てても得たいと思う最愛の女性と。

ジャンはアンジェリーヌからブランシエス家の後継者のことも聞いていなかった。

彼女の絵からすると後継者に選ばれても不思議ではない。

だがそのことで彼女が自分とのことを諦めたりはしないはずと思っていた。

「父上、俺は国家を裏切ろうとしているのではない。これからだって王子として国の力になっていくつもりだ。いつか兄上が国王として立った時、その片腕になりたいと思っている。ただ結婚だけは譲れない。他の何を諦めてもアンジェリーヌとの事だけは譲れない。もしどうしても認められなければ、俺は王家を出る。貴族に……臣下になる。王子の身分を捨てる！！」

ジャンは立ち上がって熱く言い放った。

いつの間にか国王に対して敬語を使うことさえ吹き飛んでいた。

「父上」

ジャンの様子を見かねてリュシアンが口を挟んだ。

リュシアンにはこうなることが薄々分かっていた。だから二人だ

けで話をさせずに同席したのだった。

「私からもお願いします。ジャンの結婚を認めて下さらないでしょうか？ ジャンに王家を去られては父上にも私にも、しいては国家にも大きな痛手となりましょう。確かに縁談による王家への利益も大切です。しかしそれだけでしか王子としての役目を果たせないわけではありません。ジャンには結婚以外のことで王子としての役目を果たしてもらいます。結婚による王家の強化は私が引き受けましょう。父上の意に叶った方がいれば、いつでも私がその方と結婚いたします。ですからどうかジャンとアンジェリーヌのことを認めてやって頂きたいのです」

「それでは兄上が俺の犠牲になってしまおうようなものだ！」

「私のことは考えなくていい。ジャンはアンジェリーヌとのことだけを考えていなさい」

リュシアンは思う。

自分は王太子。元より自由のない身。結婚相手を選べないことなど初めから承知の上だと。権力を手にする代わりに、多くのことを諦めなければならぬ立場なのだ。

だからこそ思う。せめて弟は自由に生きて行って欲しいと。

エドワール四世はしばらく俯いたままじっと考え込んでいた。何がこのアラントル王国にとって、王家にとって一番よい方法なのかを。

ジャンは言ったことは実行する男。

結婚をこれ以上反対すれば、本当に王家を出ていくだろう。

苦渋の選択を強いられたエドワール四世は、ジャンの有無を言わせない強い瞳を前に、諦めの溜息を吐いた。

「お前を失うのは確かに王家にとって善くないことだ。……仕方がないが認めよう」

「父上！」

ジャンは喜びの声を上げると嬉しそうにリュシアンを見た。

「よかったな」

「ありがとう、兄上。……でも兄上を辛い立場に立たせてしまったな」

「気にしなくていい。ジャン、私はお前のことを頼りにしている。お前を無くしたくなかったから助言したまでだよ」

リュシアンは弟を労わる優しい笑みで答えた。

第一段階は乗り越えた。大きく前進した思いをジャンは噛み締めた。

（これでアンジェリーヌを迎えに行ける）

ジャンの心は喜びに湧くのがあった。

(5)

アンジェリー又は王宮へ招かれた。

王座に座るエドワール四世に畏まり控える。

すぐ隣にジャンがいてくれることで少しは落ち着けたが、やはり国王を前にして緊張は隠せない。

エドワール四世の横には左側に王妃、反対側にはリュシアンが座っている。

「そう固くならずともよい。顔を上げなさい」

エドワール四世に言われおずおずとアンジェリー又は頭を起こし、壇上で腰を降ろしている彼らを見た。

「父上、これではアンジェリー又に緊張するなと言う方が無理なことです。何も謁見の間で会うこともないではありませんか」

ジャンはアンジェリー又を気遣う。

自分の妻になる人として両親に紹介するつもりだった。だがこうしてわざわざ謁見の間に通されたことに納得のいかない様子だ。

「ジャン、いいのよ。本来ならこうして口をきくことも出来ない方々なのだから……」

アンジェリー又は覚悟していた。

いくら許しを得ることが出来たとはいえ、きっと快くは迎えてはもらえないだろうことを。

「確かにお前達の結婚は許した。だがアンジェリーヌに聞く。王家に嫁ぐからにはブランシェス家を継ぐ以上の重圧が押し掛かるだろう。それを受け止める覚悟は出来ているか？」

エドワール四世の重い言葉が室内に響いた。

貴族とはいえ男爵で下級貴族の家柄。

他国の王族や公爵が嫁ぐ以上の苦難が待ち受けているに違いない。

「父上、俺がアンジェリーヌに負担を掛けさせたりしない。彼女を脅すようなことは言わないで下さい」

「ジャン、言葉が過ぎるぞ」

堪らず口を出したジャンをリュシアンが静止した。

「しかし……」

続けようとした言葉にアンジェリーヌが首を振る。

「ジャン、いいの」

アンジェリーヌは真っ直ぐエドワール四世を見つめた。

「私は貴族とはいえ男爵の娘。その私が王家に嫁ぐということは親

との縁を切るも同然のことです。父にこの話を告げた時、父も言いました。『王家の一員になるということは二度と家の門をくぐれない、里帰りも出来ない。その覚悟があるのか』と。私は後継者に選んでくれた父に申し訳なく思いましたが、ジャン殿下と共に生きることを選びました。その代わりというわけではありませんが、私はもう二度と絵筆を持たないと決めました。貴族の仕来りすら何も知らない私です。それを学び身に付け王家に身を捧げる。それが私の示すことの出来る覚悟です」

「アンジェリーヌ、お前は絵までも捨ててしまうのか……？」

アンジェリーヌの決意を知り、ジャンは驚愕の瞳を彼女に向けた。

絵を描いている時の彼女の瞳が生き生きしていたことを一番知っているのはジャンだ。

自分の妻になるために彼女の生きがいを奪ってしまおうとしていることにジャンは胸を痛めた。

「王家に嫁ぐからには学ぶべき事、やらなければならない事がたくさんあるわ。絵を描いていたら私は絵の方へ逃げてしまう。それでは嫌なの。中途半端なことはしたくないのよ」

「それで本当にいいのか？」

「ええ。私はたとえ絵を失っても、あなたとの未来があればそれだけでいいの」

アンジェリーヌのすでに決まった心に、ジャンはそこまでして自分を選び抜いてくれたことを嬉しく思いながら、その代償の分まで

彼女を守り幸せで満たしていこうと胸に誓った。

エドワール四世が立ち上がり、アンジェリーヌの傍まで降りて来た。

「アンジェリーヌ」

その呼び掛ける声は優しさを含んでいた。

「そなたの覚悟は聞かせてもらった。ジャンを支え、王家の一員として国家のために尽くすよう努めなさい。私はそなたをジャンの妻として、私の娘として快く迎え入れると約束しよう」

疎まれると覚悟していたアンジェリーヌは、意外な言葉にまじまじとエドワール四世を見上げた。

エドワール四世の笑みさえ浮かべた顔を見て、アンジェリーヌの心は徐々に喜びに湧いた。

「ありがとうございます」

その後アンジェリーヌは王妃やカミーユとも挨拶を済ませ、謁見の間を出た。

ジャンとリュシアン、そして彼らの片腕的存在で宰相の息子でありリュシアンが王となる時はその地位を引き継ぐだろうと思われているイレール・ロ・ソシエルも一緒だ。

イレールは今年二十六歳になる。アラントル王国内でも明晰な頭脳の持ち主で、常に沈着冷静。胸まである銀の髪を後ろで一本に縛

り、心の奥まで見透かすような灰色の瞳で物事を見定める。その姿は文官に相応しいものである。

四人は宮廷内を歩いていた。

アンジェリーヌに宮廷を案内しているのだ。

前に訪れた時大体は見て回っていた。だが王族にしか入れない場所に今回は通された。

肖像画の間もその一つだ。

代々の国王と王妃の二人一組で描かれた数々の絵。

アンジェリーヌは先祖が描いてきた代々の国王に囲まれるような感覚がした。

王家の歴史とブランシエス家の歴史を一度に肌に感じた思いだった。

重厚な雰囲気、アンジェリーヌは息をすることさえ憚られる気さえた。

ただ一つ、アンジェリーヌは気になることがあった。

初代国王と王妃の肖像画。

それを見た瞬間、アンジェリーヌは自分の胸に手を当てた。

初代国王の額に描かれた自分の胸にあるものと同じ緑の石。

(私と同じもの？ それとも額飾り？)

自分以外にも宝石を生まれ持つ人間がいるかもしれない。自分だけが異端者ではないのかもしれない。稀なのだろうが他にも存在するかもしれない。

アンジェリーヌは確かめたかった。だがその前に自分のことをまずジャンに打ち明けなくてはいけないと思った。

「ジャン、あの……この後二人だけで話したいことがあるの。時間もらえる？」

「どうした？ 改まって」

深刻そうに話し掛けてきたアンジェリーヌにジャンは不思議そうに答えた。

「大切な話があるの」

アンジェリーヌの真剣な眼差しにジャンは頷く。

「……分かった。宮廷の案内が終わったら俺の部屋へ行こう」

その後、宮廷内でも一番広く長い回廊を歩いている時だった。

軋むような音と頭上のシャンデリアが揺れる音にふとアンジェリーヌが真上を見上げた時、直径三メートルはある大きなそれが落下してきたのだ。

アンジェリー又は目を大きく見開き身動き一つ出来ない。

同じく異変に気づいたジャンがとっさにアンジェリーを庇う。

そしてリュシアンは　。

リュシアンの身に異変が起こったのはまさにその瞬間。

全身の血が沸き返るような熱を感じた。その熱が額の一点に集まったような気がした時、リュシアンの辺りが太陽の光のごとく輝いたかと思うと、シャンドリアが粉々に砕け散った。

粒子のようにまさに粉碎されたのだ。

誰もがすぐには声を出せなかった。

(何が……どうなったの?)

茫然とアンジェリー又は辺りを見る。シャンドリアの粒子が四人を避けるようにして散らばっていた。

(急に胸が熱くなったと思ったら……)

アンジェリー又は胸の狭間を服の上からギュッと掴んだ。突如熱を持った胸の石はまだ熱を残している。初めてのこと、アンジェリー又は戸惑わずにはいられなかった。

リュシアンの額飾りの留め金が外れ足元に落ちた。

その音に反応し彼を見たアンジェリー又はその額を見て息を呑ん

だ。

リュシアン額の中央には三ミリ程の深紅の宝石が付いていた。飾りなどではない。額に直接埋まっているのだ。

リュシアンはハッと我に返り額に手を当てた。

「私は……今、何を……」

リュシアンも自分の身に起こったことに驚きを隠せない。

「殿下、神の血が赤く染まっています。シャンデリアを砕いたのは殿下の力です」

イレールの言葉に、リュシアンは彼をまじまじと見つめる。

その間に赤かった額の宝石が深い緑色に姿を変えた。

(色が……変化した。私と同じ……色に)

アンジェリー又はジャンに手を引かれ立ち上がる。

ジャンも目の前の出来事を信じられないように見渡している。

アンジェリー又はリュシアンの額の宝石を見つめた。

(初代国王の肖像画にあったのと同じだわ。もしかしたら……)

アンジェリー又は先程の肖像画を思い出す。

代々の国王は皆額飾りをしていた。そして現国王も前会った時も今日も額飾りをしていた。

していなかったのはただ一人。初代国王だけ。

(もしかしたら国王全員が額にこの石を持っていたんじゃない……。だからいつも額飾りで隠していた)

アンジェリー又は浮かんだ考えが正しい気がした。

「……しかし神の血は紅の女神がいなければ」

リュシアンは呟き、ハツと気づいたようにアンジェリー又を見た。

「ま……さか」

「恐らく間違いないと思われます」

リュシアンの信じられないといった言葉を受けイレールが答えた。

ジャンも二人の言葉の意味を知り、アンジェリー又を見つめその手を握る。

(私が……どうしたの?)

ただ一人その意味を知らず、アンジェリー又は戸惑う。

「アンジェリー又が……紅の女神だと?」

ジャンが重々しい言葉で呟いた。

(紅の女神?)

アンジェリー又は意味を呑み込めない。

そこに一人の大臣が近づいてきた。マルシーナ伯爵である。

「リュシアン王太子殿下。私は見ました。今のはまさしく神の血の力。するとこの方があの紅の女神なのですか?」

この現場に通りすがりに居合わせたマルシーナ伯爵は興奮気味にリュシアンに言葉を掛けた。

よもや目撃者がいるとは思わなかったリュシアンは、とっさにマルシーナ伯爵に詰め寄る。

「今ここで見たことは忘れなさい。他言無用に。……よいな?」

有無を言わせない響きを含んだ声に、マルシーナ伯爵は頷くより他になかった。

言葉にのまれおずおずと去っていくマルシーナ伯爵を見送った後、リュシアンはアンジェリー又達を見渡す。

「私の私室に行こう」

大事な話があるからとリュシアンは続けた。

アンジェリー又を除く二人は頷いた。彼女だけが何も分からず後

にっついて行くことで精一杯だった。

(6)

部屋には重い空気が流れていた。

リュシアンは私室に集まった四人はしばし無言だった。

それを破ったのは集めたリュシアン本人だった。

「イレール、あれが神の血の力……なのか？」

「私も実際目にしたのは初めてですが、まず間違いないでしょう」

イレールは冷静に答えた。

「紅の女神も彼女に間違いないと思うか？」

リュシアンはちらりとアンジェリーヌを見る。

「はい。あの場にいた女性は彼女ただ一人」

二人の会話を聞いて、アンジェリーヌは不安げにジャンを見る。

ジャンはアンジェリーヌを安心させてやりたいと思うが、その表情は硬かった。

ジャンの心にも不安が渦を巻いていた。だからジャンはアンジェリーヌの手を握ったまま離そうとしなかった。

リュシアンは額飾りを外すとアンジェリーヌを見た。

「アンジェリーヌ、そなたこれと同じものが体のどこかについていないか？」

アンジェリーヌは戸惑いながら小さく頷いた。

「本当か！？ どこに？」

驚きを隠せないジャンがアンジェリーヌの両の腕を掴んで聞いてきた。

「大切な話があるって言ったのはこのことだったの。私は普通の人と違うものを身体に持っている。夫となるあなたにだけはこの秘密を話しておかなくては……」と思ったの。でもこれが何なのか私は知らないわ。……紅の女神って何？ 神の血って？」

不安そうにアンジェリーヌはジャンを見つめた。

「話す前にお前の石を見せてくれ。本当に兄上と同じものなのか確かめたい」

「ジャンにだけなら……。私の石はここにあるの。だから……」

アンジェリーヌは胸の狭間を押さえた。これを見せようとするれば胸も見せなくてはならない。異性に胸を見られるのは恥ずかしかった。

「……兄上、隣の部屋借りてもいいか？」

「ああ」

事情を察したジャンはリュシアンの許しを得ると、アンジェリーの手を引き隣の部屋へ移動した。

アンジェリー又はジャンに背を向けるとドレスの胸元のリボンを解き、一度深呼吸をした後彼に向き直った。そしてそつと胸元を広げる。

恥ずかしさのあまり、アンジェリー又はジャンから視線を逸らさずにはいられなかった。

ジャンは深い緑色の宝石に人差し指でそつと触れた。アンジェリー又は触れられた瞬間、鼓動が跳ねる。心臓の音がやたら大きく感じじた。

確認し終わったジャンは彼女の服を直した。

「こんなことさせてすまなかったな。……確かに兄上と同じ石のようだ」

「やっぱりそうなの……」

「やっぱり?」

アンジェリー又は頷いた。

「あの時……リュシアン王太子殿下が光に包まれた時、私の石も急に熱を持ったの。だからきつと同じ石なんだろうと……」

「そうか」

ジャンは自分を納得させるように呟いた。

二人はリュシアン達のいる部屋に戻った。ジャンは彼らに石がまず間違いないこと、リュシアンの石に反応して熱を持ったらしいことを伝えた。

「兄上、本当にアンジェリーヌが兄上の紅の女神なのかどうか、もう一度確かめてみてくれないか？」

「どつやって？」

「例えばあの花瓶を壊してみるとか。アンジェリーヌが本当に兄上の紅の女神なら、神の血の力で破壊できるだろう？」

ジャンの指したのは部屋の隅にある五十センチ程の花瓶。もちろん生花も飾ってある。

水の入ったその重さは大の大人一人で持ち上げるのがやっとのものだ。

「無茶なことを言わないでくれ。神の血の力は街一つ消すことの出来る強大なものだ。さっき初めて使ったばかりでコントロール出来る自信などない。一歩間違えば宮殿ごと破壊しかねないのだぞ」

使った者だから分かる、力を行使する恐怖。

さっきはシャンデリアだけで済んだ。あの時も少し間違えば宮殿を破壊していたかもしれないのだ。

「やってみてはいかかでしょう?」

「イレール、そなたまで何を言う!?!」

「心を落ち着かせて、対象物のみ壊すことに集中したら多分大丈夫でしょう。彼女が紅の女神かどうかはつきりさせなくてはなりません」

ジャンとイレールに見つめられ、リュシアンは思い詰めたように考え込む。

紅の女神が本当にアンジェリーヌかどうか確かめなくてはならない。しかしコントロール出来る自信がない。

もしアンジェリーヌが紅の女神なら、彼女は神の血と紅の女神のことを知らねばならない。王家が守ってきた、王族とごく少数の大臣しか知らない王家に受け継がれる血の秘密を。

「……分かった。やってみよう」

リュシアンは決心すると、額飾りを外した。

深呼吸をして心を落ち着かせると、真っ直ぐ花瓶を見据える。

そして花瓶が壊れるよう心に強く念じると同時に、先程の血の湧き上がる感覚が再びリュシアンの体を駆け抜けた。

額の宝石が深紅に染まる。

同じくしてアンジェリーヌも胸が熱くなるのを感じた。

陶器の割れる甲高い音が部屋に響いた。

花瓶がシャンデリアの時と同様粉々に砕け散った。

それだけに留まらず、花瓶を載せていた台までもが同じく原形を留めることなく辺りに散らばっていた。

アンジェリー又はそつと自分の胸の狭間を覗き込んだ。

(……赤くなってる)

もはや自分が紅の女神という存在であることは、疑いようのない事実だと認めるしかなかった。

リュシアンはホツと息を吐く。宝石は緑色に戻っていた。

極力は抑えたつもりだった。だが目的以外の物まで破壊してしまった。

リュシアンは改めて神の血の力の大きさを実感せずにはいられなかった。

「これではつきりしましたね」

イレールが言った。

「……そのようだな」

リュシアンはジャンとアンジェリーヌの座る長椅子に近寄り、ア

ンジェリーヌの横に腰を降ろした。

リュシアンは静かにアンジェリーヌを見つめた。

「今から話すことは王族とほんの一握りの大臣しか知らぬこと。そなたも誰にも、たとえ父親にも話してはならないことなのだ。よいな？」

リュシアンの真剣な眼差しに、アンジェリーヌは戸惑うように傍らのジャンを見る。

ジャンはアンジェリーヌの手を握る手に力を込め頷いた。

「はい、殿下」

アンジェリーヌは何を言われても受け止めようと思ひ答えた。

リュシアンはアンジェリーヌの様子を見て静かに語り出す。

「私の額にあるこの宝石は神の血と呼ばれていて、長男にのみ現れるものだ。普段はこのように緑色をしているが、ある瞬間にだけ色を深紅に変える」

「ある瞬間？」

「そう。……紅の女神を共にし破壊の力を発する時に、だよ。この力は攻撃の力。街一つをも容易く破壊できる力なのだ。初代の国王はこの力を使い、アランテル王国を建国したそうだ。それからはこの神の血を持つ長男が代々王を継いできた。愛人の子であるにもかかわらず、私が王太子という立場でいられるのもそのせいなのだよ」

リュシアンのお話を聞いて、アンジェリー又は以前ジャンが話してくれたことを思い出した。

兄は愛人の子だが訳あって王太子は血筋に関係なく長男と決まっていると。そして自分は第二王子であるが継承順位は三番目だと。

その理由はこの神の血と呼ばれる印のためだということをアンジェリー又は知った。

リュシアンは話し続ける。

「神の血の力を行使するには紅の女神が傍にすることが絶対条件だね。紅の女神とはこの印を持つ者一人に対してこの世に一人だけの選ばれし運命の女性。父にもその相手がこの世のどこかに存在するはずだがまだ見つかっていない。……いや、その女性と出逢う方が奇跡なのだろう。代々の国王の中でも出逢ったのは初代と三代目だけだと聞いている。この国にいるのか他国にいるのかそれを知る術はない。逢った時に神の血の力を発する他ないのだ。先程の私とそなたのように……ね」

「私が殿下の……紅の女神？」

「そういうことだ」

「でも私は王族とは何の縁もない血筋……」

「紅の女神は王族の血筋とは無縁なのだよ。それどころかアランテル国民とも限らない。ただ神の血と同じ石を身体はどこかに持っている。それが紅の女神という証拠なのだ」

リュシアンの話はアンジェリーヌから口数を奪っていった。

王族とほんの一握りの大臣しか知らない王家の秘密……神の血。それだけでもその力を目の当たりにしたアンジェリーヌに驚きを隠せないほどの衝撃を与えた。

さらに追い討ちをかけたのは紅の女神の存在。

神の血の運命の相手。

リュシアンは運命の女性がこの自分なのだとは知らされ、アンジェリーヌはショックを受け不安に駆られた。

愛しているのはジャン。

しかし自分の運命の相手は彼の双子の兄、リュシアン。

アンジェリーヌは運命という渦に飲み込まれてしまいそうだった。

「アンジェリーヌ、不安がることはないよ。そなたは紅の女神の運命に縛られることなく、ジャンとの愛を育んでいけばよい。もし万が一神の血の力が必要になったら、その時だけ力を貸してくれればいいのだから」

「……リュシアン殿下」

彼の温もりある微笑みに、少しだけアンジェリーヌの心が軽くなった。

「ジャン。彼女を守るのはお前の務め。紅の女神という重圧を取り除いてやるのもお前の役目だよ」

「分かってるさ」

リュシアンに諭され、ジャンは頷いて答えた。

「ジャン殿下とアンジェリーヌの結婚、早めた方がいいのでは？」

イレールがリュシアンに問い掛けてきた。

「どうしてだ？」

「彼女が紅の女神だと明るみに出れば、恐らく大臣達はジャン殿下とではなくリュシアン殿下との結婚を進言してくるはずです。先程殿下はマルシーナ伯爵に口止めされましたが、あの男、気の弱いところもあります。もしそこから漏れでもしたら……。今のうちなら国王陛下の許しも頂いていることですし、大臣達も強引には言っただけで済まないでしょう。一度結婚したらそれを取り消してまでリュシアン殿下と結婚させることはないと思いますし」

「アンジェリーヌを不安がらせるようなことは慎むのだイレール。大丈夫。もしアンジェリーヌが紅の女神と知れてしまっても、国王は一度許したことをそう簡単には翻したりはしない。それに彼女は王家の一員になるのだ。この宮殿にいる限り、万が一の時はずぐにでも助けてもらうことも出来る。何も案ずることはない」

「そうだといいいのですが……」

イレールは言葉を濁した。

イレールは自分の中に広がる不安な考えが無駄に終わって欲しいと願った。

その時、扉を叩く音が突如響いた。

皆、一斉に扉を振り返る。

「王太子殿下、……王太子殿下いらっしやいますか!！」

「何事だ」

イレールが扉を開けに行く。彼が扉を開けるのを待ち構えていたかのように、声の主オーシヨン子爵が口を開ける。

「大変です。国王陛下がお倒れになりました。意識もなく危険な状態だそうです。陛下の許へお急ぎ下さい!！」

「父上が!?!」

リュシアンとジャンが顔を見合わせる。

つい先程会ったエドワール四世の顔がアンジェリーヌの胸にも浮かんだ。

(そんな……。さっきはそんな様子全然感じられなかったのに)

「両殿下、急ぎましょう!！」

三人がリュシアンの私室を飛び出そうとした。

「アンジェリーヌ、お前も来い！」

ジャンが振り返りアンジェリーヌを呼んだ。

「私などが行っても……」

王の私室に入れるのは王族のみ。

国の一大事で大臣などの地位の高い貴族は見舞いに入れても、自分などが入れるはずもないとアンジェリーヌは踏み止まろうとした。

「お前はもう王家の一員だ。来い！」

ジャンに強く言われ、アンジェリーヌは自分が王家に嫁ぐ身だと自覚した。

「はいっ！」

アンジェリーヌも三人の後を追うように駆け出した。

国王は自分の私室で横たわっていた。

リュシアンとジャンはエドワール四世の傍らに並んで立つ。

王妃とカミーユがそれに続くように部屋に到着した。

リュシアンは御典医を見る。

御典医はリュシアンが言葉を発する前に静かに首を横に振った。

「手の施しようがありませんでした。……すでにお亡くなりでございます」

その場にいた全員が息を呑んだ。

「母上！」

シヨックに耐えきれず倒れた王妃をカミーユが支える。

「それは、真……か？」

リュシアンは信じられない思いでもう一度確かめた。

「はい。恐れながら申し上げます。崩御あそばされました。……傍におりました者の話では、陛下は頭を抱えるようにして倒れられたそうです。恐らく頭の中の血管が詰まったか切れるかして脳に異常が出たのだと思われます。今の医学ではどうすることも出来ませんでした。力及ばず申し訳ございません」

「……………ご苦労だった」

リュシアンは事実を受け止めようと必死だった。

ジャンは眠るエドワール四世の手を握った。

力の抜け切ったエドワール四世の手は、ジャンに彼の死を伝える。

ジャンもまた、受け止められない現実に手が震えていた。

「父……上」

ジャンの悲痛な呟きがアンジェリーヌの胸を打った。

(こんなことになるなんて……)

まだ一日も経っていない。彼が自分の娘として迎え入れると告げてくれたから。

国王としては厳しい人だったのだろう。しかし父親としてはきっと家族を慈しみ愛していたに違いない。

アンジェリーヌはエドワール四世が迎え入れると告げた時の優しい表情を思い出してそう思った。

「リュシアン王太子殿下」

彼の傍に一人の中年男性がやって来た。現宰相であり、イレールの父でもあるギョーム・ロ・ソシエルだ。

「ギョームか。父上がまさかこんなに早く逝ってしまわれるなんて……」

リュシアンは肩の力を落とし呟くように言った。

「はい、残念でなりません。お悔やみ申し上げます。……ですが王太子殿下、辛い胸の内はお察ししますが、これからのことで色々打ち合わせがございます。陛下の葬儀、そして新国王の即位式が待っております」

「分かって……いる」

リュシアンは表情は悲痛に満ちていた。

そこには国を統べる国王の地位につく者の喜びなど微塵もない。

アンジェリー又はジャンとリュシアン的一步後ろから二人の姿を見つめていた。

（これが王族なの？ ……これが国の中心となる者の宿命なの？）

家族の死の悲しみに浸る時間さえ与えてもらえない。

国を守る者として、その歩みを止めることを禁じられた一族。

最高の地位と引き換えに、彼らは家族の愛情を犠牲にしてきたのだ。

アンジェリー又は噛み締める。

これが王族なのだ。

そして自分もこの一員になるのだ。

一個人としての感情を人前でむやみに露にしていけない。

リュシアンとジャンが気丈に対応している様子に、アンジェリー又は彼らの心の内を思うと、二人に何も声を掛けることが出来なかったのだ。

(7)

エドワール四世の死から二十日程が過ぎていた。

その間に国王の葬儀と新国王の即位式が執り行なわれた。

アンジェリー又は国王が死んだその日から、一度もジャンと逢う時間を持てずにいた。

国を挙げての葬儀と即位式。

慌しい日々にジャンも自分の時間をほとんど持てずに過ごしていた。

アンジェリー又はジャンに逢えないことを淋しいと思っていたわけではない。王族の背負う宿命に、ジャン達が辛い思いをしていないだろうかと案じていたのだ。

アンジェリー又はジャン達を一瞬だけ垣間見ることが出来た。

リュシアン、いや新国王シャルロ二世の即位式のこと。宮殿のバルコニーにジャンとリュシアンが姿を見せた時だ。

大勢の人ごみの僅かな隙間から見え隠れする二人の姿をアンジェリー又は必死に目で追った。

歓喜に湧く国民の声に答えるように、笑顔で手を挙げるシャルロ二世。その隣で兄を見守るジャン。

表に出さないようにしてはいるが、普段の二人を知るアンジェリ
ーヌの目には彼らの疲れている様子が映っていた。

何か力になりたい。

そう思っても今は逢う時間すら持てないのが現実だった。

一方無事即位式を済ませた宮廷では一つの事が大臣達の間で話し
合われていた。

新国王の妻、王妃に誰を迎えるか だ。

「タグネット王国の王女はどうですか？ 歳も陛下とつりあってい
ますし」

「いや、陛下には公爵の娘がよいのでは？ 陛下のご生母は他国の
貴族の方。アランテルとの絆を確固たるものにするためにも公爵の
娘から選んでみてはいかがでしょう？」

「陛下はこのアランテルの方。国との絆はもはや確かめなくとも心
配ないのでは？」

「そうだ。それよりも他国の王族から王妃を迎えた方がよい。その
方が何かと国のためにもなるはずだ」

大臣達の討論は続いていた。

その中にイレールの姿もあった。彼は父ギョームの隣に座ってい
た。この問題が解決したら、ギョームはイレールに宰相を譲ろうと
決めていた。

イレールは席の一番端に座るマルシーナ伯爵をチラッと見る。

(この様子ではあの男は口を挟めまい)

リュシアンはアンジェリーヌ以外の女性なら誰とでも結婚する決意をしていた。

今もしマルシーナ伯爵がアンジェリーヌのことを言い出せば、リュシアンの願いが危ういものとなる。

だが気の弱いマルシーナ伯爵がこの状況で意見出来るとはイレールには思えなかった。

いつこうに話の結論がつかない状態が続いていた。

すると伯爵の一人がそれまで無言だった一人の男に話を向ける。

「カロンヌ公爵はどのようにお考えですか？」

その声に一斉にカロンヌ公爵に視線が集まった。

グレゴワール・レ・カロンヌ。

十五代国王を祖父に持ち、先々代の十六代国王の弟を父に持つ、王族に最も近い血筋の公爵家の家長。アランテル国民ならば知らぬ者はいない貴族中の大貴族だ。彼の言動は国王に匹敵するほどの影響力があった。

カロンヌ公爵は表情を少しも崩さず、落ち着き払った態度で自分

の意見を語り出す。

「私はやはり国王の血筋を考えると、少しでも王家に近い血を……と思う。皆が知っている通り、私は元々長子の神の血より正妃の子の王子を国王にすべきと思っていたからな。だが国が定めた規則なのだからそれは仕方のないことだが、だからこそせめて王妃は公爵家から出した方がよいと思う。まあもし……」

カロン又公爵は少し嘲るような笑みを浮かべた。

「もし紅の女神がいるのであれば話は別だがな。もっともそんな存在が本当にいるのかどうか、神の血の力があるのかどうかですら、今生きている者は誰も知らぬことだ」

彼はこの世に紅の女神など存在しないとしてもいうような口調で言った。

紅の女神という言葉が出たことに、イレールはこれ以上話を伸ばすのは良くないと思った。

「父上、カロン又公爵もあのように言っておいでなのですから、王妃は公爵家のご息女ということでもいいですね？」

「……そうだな」

まとめり掛けたその時。

「あ……あのう」

遠慮しがちに俯いていたマルシーナ伯爵が言葉を発した。

イレールはまずい……と思った。マルシーナ伯爵の口を閉ざそうと彼を睨みつける。

だがマルシーナ伯爵は震えながらも口を開いた。

「イレール殿、私はやはり黙っていることは出来ません。シャルロ二世陛下の妃には紅の女神がなるべきです」

イレールを恐れ的眼差しで見ながら、マルシーナ伯爵は一気に言い放った。

マルシーナ伯爵の発言に周りがどよめく。

「紅の女神がいるというのか!？」

「イレール殿は前からご存知だったのか!？」

イレールは唇を噛み締めた。

リュシアンに口止めされた上、多数の大臣の前で発言できるような男ではないと判断していた。

だが彼は紅の女神の存在を黙って見過すことこそ神の意に沿わぬことだと恐れを抱いた。カロンヌ公爵の発言がそれを後押ししたのだ。

イレールは彼のその心理を見抜けなかったことを悔やんだ。

「イレール、本当か？」

ギョームの鋭い眼差しに、イレールは誤魔化そうにも、いつものように父には見抜かれてしまうと感じて頷いた。

「それは誰だ？」

「宮廷画家ブランシエス男爵の娘アンジェリーヌです。ですが彼女は既にジャン殿下の婚約者。もうすぐ王家の一員になる身です。前国王の許しも頂いています。必要な時は陛下を助けると陛下と約束も交わしています。もしジャン殿下の熱望される彼女を妃に選んだら、それこそジャン殿下と陛下との間で争いが起きることになります。ですからアンジェリーヌだけは妃の候補から外して頂きたい」

イレールは言った後、大臣達を見渡した。

(納得………するか?)

だがイレールは感じていた。状況が厳しいことを。

「前国王はアンジェリーヌが紅の女神と知っていて、ジャン殿下との結婚を承諾したのか？」

口を開いたのはギョームだった。

「いえ前国王はご存知ありませんでした。アンジェリーヌが紅の女神だと分かったのは前国王の許しを頂いた直後です。マルシーナ伯爵が目撃したのは初めて陛下の神の力が現れた時のこと。そこに居合わせた女性がアンジェリーヌだけだったことで、紅の女神が彼女と分かったのです」

「前国王が紅の女神を知らなかったのなら、その婚約はなしにすべ
きだ」

一人の大臣が発した言葉を機に、大臣達がざわめき出す。

紅の女神であるアンジェリーヌを妃に。

話は一気にその方向へ流れ出した。

イレールが一番不安に思っていたことが起こってしまった。

リュシアン達は大臣達の紅の女神に対する意識を軽く見ていたの
だろう。

奇跡的な出逢いがなければ神の血の力は無いに等しい。そしてそ
の神の血の力を手に入れたのなら、何を犠牲にしようと国を守るた
めに手放す真似は決してしない。

紅の女神を王妃という檻に閉じ込めてしまうことで、それを成し
遂げようとしているのだ。大臣達にとって紅の女神は王家の一員と
いう立場だけでなく、王妃として存在することに意義があるのだ。

「男爵の娘をどうやって王妃に迎えるのだ？」

イレールの思いとは裏腹に、どんどん話は進んでいってしまっ
ていた。

「確かに男爵程度の身分で王妃となると民衆も納得すまい」

「……では一度公爵の養女にしてから嫁がせるとい一手はいかがで

しよつっ。」

「おお、その手段があつたか！」

イレールはどうかして大臣達の考えを変えようと思うが方法が見つかからない。

つい少し前まで互いに意見を譲らなかつた大臣達が、今は一致団結して語り合っている。もはや紅の女神を妃にする以外のことは皆眼中になかつた。

「イレール、お前が陛下とジャン殿下を説得しなさい。幼い頃から共に過ごしてきたお前の口から伝えた方が、お二人とも納得せざるを得ないだろう。」

「父上、陛下はともかくあのジャン殿下を説得できるとお思いですか！？ 殿下の気性は父上もご存知のはずです。アンジェリーヌを妻に出来ないとなれば殿下は彼女を連れ去るか、もしかしたら王家へ復讐するかもしれませぬよ！」

「お前なら出来る筈だ」

ギョームのはつきり断言した言葉に、イレールはもう後戻り出来ないことを悟つたのだつた。

*

*

*

「陛下、まずいことになりました」

イレールはその足でリュシアンのある政務の間に向かい、重々し

い口を開いた。

リュシアンは書類に目を通すのを止めイレールを見る。リュシアンの目にはイレールの姿が心なしに青ざめている様にも見えた。

「……何かあったのか？」

深刻な話であることに違いない。

リュシアンもまた自然と声が低くなった。

「陛下の妃が……アンジェリーヌに決まりました」

彼女の名を聞いたとたん、リュシアンは机を叩いて立ち上がった。

「どういうことだイレール!? 私はアンジェリーヌ以外で言ったではないか!!」

「申し訳ございません。私の考えが浅はかでした。よもやマルシーナ伯爵があ場で発言するとは……。マルシーナ伯爵の発言で紅の女神を妃に……と決まってしまうました。私一人の力では大臣達を説き伏すことが出来ませんでした。申し訳ございません」

リュシアンが歩き出す。

「どこへ行かれます？」

「私が大臣達に直接断ってくる」

普段は物静かなリュシアンが強い口調で言った。

「なりません！」

イレールはリュシアンの前に立ちほだかる。

「今のあなた様の立場は国王とはいえまだその地位に就いて間もない身。重臣達に意見すれば宮廷内に多くの敵を作ることになります。そうなれば政務もやり辛くなりますし、第一陛下のお立場を更に弱くするでしょう。陛下はただでさえ御生母の事で肩身の狭い思いをされていますのに、これ以上家臣との隔たりを広げるようなことをなさってはいけません！」

「ではどうしろというのだ！」

「アンジェリーヌを妻に……王妃になさいませ」

「……………何？」

リュシアンは眉をひそめた。

イレールからこの言葉を告げられるとは思ってもみなかったのだ。

「もはや紅の女神を王妃にする以外、大臣達を納得させる術はございません。ジャン殿下のことは私が何とか説得致します」

イレールが言うのだから本当にもうそれしか方法がないのだろうとリュシアンは思うが、弟を、そして想いを寄せるアンジェリーヌの幸せを願っていたリュシアンの心は、それでも何か手段があるのではないかと模索せずにはいられなかった。

「……私には出来ぬ。あの二人は本当に愛し合っている。それを引き裂くことなど私には出来ぬ！」

リュシアンは苦しく吐き出すような言葉に、イレールはなおも告げる。

「陛下のお優しさは私も重々知っております。その上で申し上げます。アンジェリーヌを陛下の妻に。……陛下ならアンジェリーヌを幸せに出来ます」

イレールの言葉に、リュシアンは彼の見据えるような眼差しを見返す。

アンジェリーヌを幸せに出来る。

イレールが何故そう断言できるのか、疑問の瞳を彼に投げかけていた。

「幼き頃よりお仕えしてきた私に、陛下のお心が見抜けないと思いですか？ ……陛下もまた、殿下と同様にアンジェリーヌに心を奪われておいでなのは分かっております。陛下のその想いがあれば、アンジェリーヌの心を満たしてやれるはずですよ」

イレールに心を見抜かれていたと知ったリュシアンは、改めて彼の洞察力に脱帽する。そしてその彼の言う通り、アンジェリーヌを王妃にする以外方法がないことを認めるしかなかった。

「国王とはいえ、……無力なものだな」

今の自分には臣下を一蹴する力などない。臣下に支えられて国王

の地位にいるのだ。

神の血を持っていなければ。

彼女が紅の女神でなかったら。

母の身分がもっと高貴であつたならば。

思えば思うほど、力のなさを痛感する。

アンジェリーヌの翼をもぐことになつてしまつたリュシアンは、己に対して憤りさえ抱いた。

「自分の力をお悔やみであれば立派な国王になつて下さい。陛下が力をつければ臣下もおのずとついて参ります。私も陛下の手足となりお助け致します。もう二度と陛下が辛い決断をせずに済みますよう尽くします」

イレールの言葉にリュシアンは黙つて頷いた。

自分達が強くなるしかない。臣下に文句の一つも言わせないよう、国を正しき道へ動かせるようにならなければならない。

それは決して独裁政治にするという意味ではない。

反対する者がでないような政策を打ち出していくということ。誰も認める方法で国を導いていくということだ。

誰かの不幸の上に成り立つ平和など本当の平和とはいえない。不幸に陥れられたその者にだけ平和が訪れないようなことがあつては

ならない。

理想論かもしれない。けれども理想に近づこうとすることは決して無駄ではないのだ。

リュシアンはアンジェリーヌの身に起こった不幸を、このまま不幸で終わらせまいと心に誓った。

「では私はこれからジャン殿下を説得して参ります」

イレールが踵を返す。

「待てイレール」

リュシアンが呼び止めた。

「ジャンには私の口から言う。……ジャンとアンジェリーヌ、二人を私の許へ呼んでくれ」

イレールが意外そうな表情をリュシアンに向けた。

「私がジャンを説得する。……私から言わなければならぬ。アンジェリーヌを妻とする私の口から言うべきだ」

リュシアンの決意にイレールは彼に任せることを承諾し、自分は補佐に回ろうと思った。

静まり返った部屋は、嵐の前の静けさを漂わせていた。

(8)

翌日、ジャンとアンジェリー又はリュシアンの私室に呼ばれた。

二人とも何故呼ばれたのかは聞いていない。

心当たりがあるとすればジャンとアンジェリー又の結婚のことだけ。

アンジェリー又は久々にジャンと逢うことができ束の間喜んだが、やがて現われたリュシアンとイレールの硬い表情を前に不安の芽が生まれた。

何かあったのだと思った。

ジャンとの結婚に暗雲が立ち込めているのを感じた。

今になってやはり結婚は駄目になってしまったのかも知れない。

アンジェリー又の心は不安に捕らわれていた。

リュシアンがテーブルに着く。イレールはその横に座った。

リュシアンの前にはジャン、イレールの前にはアンジェリー又という位置だ。

「兄上、今日はどうして俺達を呼んだんだ？」

ジャンもリュシアン達の様子からただならぬ何かを感じ取ってい

た。

リュシアンは一度俯く。何と言って切り出そうかしばらく迷っていたが、心を決めてジャンを見た。

「会議でアンジェリーヌが王妃に決まった」

リュシアンの信じられない一言に、ジャンもアンジェリーヌもすぐには何も言葉が出なかった。

(王妃？ ……誰が？ 私……………が？)

何のことかと思った。

ジャンとの結婚が取り止めになるどころか、リュシアンの……………国王の正妻である王妃にはアンジェリーヌはすぐに呑み込めなかった。

「アンジェリーヌが王妃？ ……兄上の妻に？」

ジャンも放心状態で呟いた。

リュシアンは二人の様子を見て無理もないと思った。しかしリュシアンは辛い言葉を更に口にするしかなかった。

「そうだ。私の妻に、だ。お前達の婚約は破棄された」

リュシアンのとどめを刺すような一言にジャンはよづやくその意味を理解し、そのとたんテーブルを叩いて立ち上がった。

「どづいつことだ、兄上!？」

ジャンの瞳からは戸惑いと怒りが見て取れた。

そんなジャンをリュシアンは落ち着いた眼差しで見上げる。

「言った通りだ。大臣達がアンジェリーヌを推挙してきた。私にはそれを断る力がなかった。ジャン、お前なら国王とはいえ今の私の立場がどんなものか分かっているだろう？」

「何故アンジェリーヌが……？ 紅の女神だからか？ イレール、まさかお前がアンジェリーヌが紅の女神だとしゃべったのか!？」

ジャンは鋭い視線でイレールを射抜いた。

イレールは顔色一つ変えずありのままを口にする。

「いえ、マルシーナ伯爵です。私もまさか彼がしゃべるとは思っていませんでした。アンジェリーヌの存在が知れてしまったのは私の落ち度です。マルシーナ伯爵の精神状態を見抜けなかった私のせいです。……申し訳ございませんでした」

ジャンは怒りの矛先をどこへ向けたらいいのか分からなかった。

リュシアンもイレールも、アンジェリーヌと自分を守ろうとしてくれたのは二人の言葉から分かっていた。大臣達に怒りをぶつけたところでリュシアンに迷惑をかけるだけ。アンジェリーヌを王妃にすることを阻止出来るものでもない。

「くそっ!!!」

ジャンは怒り任せにテーブルに拳を叩きつけるしかなかった。

その横でアンジェリーヌはどうしたらいいのか分からなくなっていた。

ジャンと結婚出来ない。

一度は諦めたジャンとの結婚を再度諦めなければならない。幸せの絶頂から突き落とされた思いだった。

それだけではない。

彼の双子の兄と結婚しなければならない。それも国を背負う国王の妻、王妃として。

出来るわけがないと思った。

ジャンと同じ姿をしていても別人であるリュシアンの中に、夜ごと抱かれることを考えるだけで身を裂かれる思いがした。

アンジェリーヌの顔は青ざめ、何も言葉を口に出すことが出来ないほどだった。

「アンジェリーヌ、そしてジャン。私は今でもお前達二人の仲を引き裂きたくないと思っている。……アンジェリーヌを王妃にする、その決定は覆すことは出来ない。しかし大臣達が望むのは、紅の女神を王妃という立場に縛り付けることだけ。神の血と紅の女神が国王と王妃の形として納まることを望んでいるだけだ。だから私はアンジェリーヌを王妃として迎えるが、それは表面上のことだけにす

る。妻として迎えたりはしない。……アンジェリーヌ、そなたはたとえ王妃になろうともジャンへの想いを殺さなくともよい。心も体も自由にジャンを想っていていいし、ジャンと愛を育んでいきなさい。約束するよ、私はそなたにむやみに触れたりはしないと」

「兄上、それでは俺達に陰でコソコソ愛し合えというのか？ そんなのは嫌だ。俺は俺の妻として堂々とアンジェリーヌを愛したいんだ！」

「私もお前達にいつまでも肩身の狭い思いはさせない。今回断れなかったのは国王としての私の立場の弱さだ。だから何年かかるか分からないが、大臣達に有無を言わせないほどの力つけた後、お前達を正式に結婚させる」

リュシアン之苦肉の策はイレールでさえも仰天するような破天荒な手段だった。

愛人を臣下に下げ与えることがないわけではない。しかし正妻を自分の兄弟と再婚させることなど異例中の異例。そんな話は誰も聞いたことがなかった。

「世継ぎはどうなさるおつもりです？ 神の血を受け継ぐ者を産むことも王妃の務めに含まれているのですよ。愛人に産ませるおつもりですか？ ご自分の二の舞を子供にさせたいのですか！？」

イレールは幼い頃よりこの双子の王子、とりわけリュシアンが貴族達から「愛人の子で王太子か」などと冷たい視線を向けられていたのを知っていた。

心優しいリュシアンが血を分ける我が子にそんな思いをさせたい

はずがない。

「私は、神の血が私の代で潰えてしまっても構わないと思っている。こんな印のために誰かを傷つけて生きることなど、私でもう終わりにしたい」

この神の血のために母親も王太后も、彼女の子の本来なら正式な世継ぎだったカミーユも、悩み苦しんできたに違いない。

そして今また愛し合う者達を引き裂いてしまうのだ。

人の心を犠牲にして神の血の力を得たところで、残されるのは虚しさだった。

「アランテル王国が滅んでもよいとおっしゃるのですか？」

「この国が滅びていいなどとは思っていない。ただ神の血のしがらみを終わらせたいのだ。私に子が出来なくても、カミーユが彼の子が継いでくれるだろう。本来の正当な血筋に王位が戻るだけのことだ」

「……陛下は神の血も紅の女神も、その存在を軽く考えておられる。大臣達がそれで納得するわけがありません。もし王妃との間に子がなければ、彼らは次々と愛人を紹介して何としても神の血を存続させようとするでしょう」

リュシアン本人にしか分からない神の血を持つ者としての苦しみ。

大臣らがそれを理解しようとするともなく、ただ国を守る力を得るためだけに次の代にも神の血を持つ者を王に望む。

そんな大臣らがリュシアンの考えを受け入れるはずがない。

イレールはリュシアンの立場がこれ以上悪くならないために、あの決意を密かに決めるのだった。

「とにかく世継ぎのことはまだ先のこと。まずはアンジェリーヌの件だけは承知しておいてもらいたい」

「兄上、俺は……！」

「ジャン、もう後戻りは出来ないのだ。すまないがしばらくの間我慢して欲しい。……イレール、二人には少し時間が必要だ。行くぞ」

リュシアンはイレールを促すと二人して部屋を出て行った。

残されたジャンとアンジェリーヌはお互いしばらく何も言えなかった。

アラントル王国の国王の妻、王妃になる。

それだけでもアンジェリーヌを戸惑わせるには充分だった。

リュシアンはああ言ったが、本当に一度は王妃になっておいて、その立場を捨ててジャンと一緒にになれるのであろうか。

たとえ身は清らかなままだとしても、ジャンが一度は他人の妻となった自分を受け入れてくれるのだろうか。

リュシアンの言ったしばらくの間とは何年先のことなのだろうか。

もうどうすることも出来ない状態なのは分かっている。しかしアンジェリーヌはその現実をいまだ拒絶せずにはいられなかった。

夢であって欲しい。目が覚めれば夢だったと笑い飛ばしてしまいたい。

アンジェリーヌはじっと俯いて身動き一つ出来ずにいた。

「……アンジェリーヌ」

ジャンの重い声に、アンジェリーヌは肩をビクツと縮ませた。

アンジェリーヌは恐る恐るジャンを見る。その顔は強張っていた。

彼から終わりの言葉を告げられるのではないかと思ったのだ。

ジャンもまた思い詰めた表情をしていた。

「何もかも捨てて俺についてくる覚悟、あるか？」

(それって……)

ジャンの言いたいことは分かった。だがアンジェリーヌは息を止めるほどの衝撃を受けていた。

「俺は何もかも……王子であることもこの国の人間であることも家族さえ失っても、お前だけは失いたくない。……お前はどうか？」

アンジェリーヌの胸にジャンの心が痛いほど伝わってくる。

これほどに想われていて嬉しいと、幸せだと感じた。

しかしアンジェリー又はすぐに返事が出来なかった。

今すぐにももついでに行きたい。何と引き換えにしてもいいほどジャンを愛している。

(でも私達が国外へ逃亡したら、この国は、陛下は、……私の家族はどうなってしまうの?)

ジャンはこの国にとって、リュシアンにとって掛け替えのない大切な存在。

リュシアン一人残し自分達だけ幸せになっていいのだろうか。自分達のために親身になってくれる彼を裏切ることが出来ない、アンジェリー又は思った。

それに国の決定に反したことで、家族にどれほど迷惑を掛けてしまっただろうか。家族を不幸に陥れるような親不孝などしていいはずがない。

ジャンとの未来のために自分の過去と決別する覚悟は出来ていた。しかしそれは家族の未来にも支障がないから出来た覚悟だった。けれども今は違う。反逆者の家族となってしまうたら、どんな未来が待っていることだろう。

「ジャン、……私」

ジャンについて行くことも残ることも選べないアンジェリー又は、

言葉を続けることが出来なかった。

ジャンにもアンジェリーヌの迷いがその表情から伝わってきていた。

「何も考えるな。周りのことは何も考えずに俺とのことだけ考えてくれ」

「でも陛下は……家族はどうなってしまうの？ 皆を犠牲にしてしまったら、私達本当に幸せになんかなれないわ」

「じゃあ兄上の妻のなるのか？ 兄上はああ言ったが、俺達と一緒にになれる可能性は極めて低い。ずっと人目を忍んで逢うような仲で終わってしまうかもしれないんだぞ」

ジャンの言葉にアンジェリーヌは唇を噛み締める。

ジャン以外の男性との結婚を望んでいるわけなどない。

アンジェリーヌは思おうとする。初めに戻っただけなのだと。まだ彼にプロポーズされる前、彼と愛し合えるなら妻でなくていい、愛人でいいと思った時に戻っただけのことだと。

ジャンと想いを交わせるのならば、本来それだけで充分なことなのだ。それ以上望むのはやはり我が侘なのかもしれない。

それでも一度夢に見てしまったジャンとの結婚をなかったことにするのは、アンジェリーヌにはまだ出来なかった。夢を断ち切れずにいた。

「ジャン、……私に考える時間を下さい。一生のことだから今すぐ答えを出せない。ちゃんと自分の納得出来る結論を出したいの」

迷い続けながら言葉を発したアンジェリーヌの思いをジャンは受けとめる。

「分かった。……俺を選んでくれることを願ってるよ」

「ありがとう、ジャン」

迷ったままどちらかを選んででもきつと後悔する。

そう思ったアンジェリーヌは二本の道の一本、どちらへ足を向けるのかまだ見えぬ未来を思案しつつも、もう後ろを振り返ることは許されないのだと心に刻み付けるのだった。

ジャンを残し、アンジェリーヌはリュシアンの私室を退出した。

考えなければならぬ重大なことがあるのは分かっていた。しかしあまりに衝撃的なことばかりで、アンジェリーヌの心は正直掻き乱され、心の整理をつけようとすることでまだ一杯一杯だった。

（もつと心を落ち着かせてから考えなければ。私とジャン、その周りの人々の一生に関わることなのだから）

アンジェリーヌは回廊を歩いていた足を止め、一度深く呼吸した。

「アンジェリーヌ、少し話がある」

後ろから声を掛けられ驚いて振り返ると、イレールが普段より心

なしか硬い表情で立っていた。

「イレール……様？」

あまり表に感情を出さないイレールの僅かばかりの変化が、アンジェリーヌの心に不安をよぎらせる。

イレールは立ち尽くすアンジェリーヌを促すと、宮殿内にある自分の利用している宰相の執務室へ招いた。

アンジェリーヌを部屋へ入れると、イレールは静かにその扉を閉じた。

振り返ったアンジェリーヌにイレールも向き直る。

「あの……お話って」

アンジェリーヌの握り合わせた手には力が入っていた。

(もうこれ以上何も起こらないで)

今でさえ受け止めきれない状態で更に何かあったとしたら、もう正気であることも出来なくなってしまう気すらした。

イレールはアンジェリーヌの緊張している様を見つつも、厳しい眼差しで彼女の目の前に立った。

「アンジェリーヌ、そなたは真の意味で陛下の妻になって欲しい。

……いや、なる以外もう手段がないのだ。ジャン殿下とのことはきっぱり諦めて欲しい」

(真の妻に……)

イレールの言葉が鋭くアンジェリーヌの胸に突き刺さる。

彼が何を言っているのか、その意味は分かっている。頭では分かっている。心もそれを拒んでいた。

「陛下はそなたとジャン殿下と一緒にさせたいと思って今回あのようにおっしゃったが、王妃となった者の再婚など周りが許すはずがない。強引に陛下がそれを行えば、陛下と家臣との間に深い溝が生じてしまう。だからといってジャン殿下との密会を続けていたら、陛下と殿下の間に争いが起こるかもしれない。そしてそれを利用しようとする貴族の輩も出るだろう。……アンジェリーヌ、ジャン殿下のことだ。きっと二人で国を捨てて駆け落ちする覚悟をもしていると思うが、もしそのような話があっても決して頷かないで欲しい」

アンジェリーヌは目を見開いてイレールを見つめた。

ジャンの考えなどイレールにはお見通しだったのだ。

イレールはアンジェリーヌの反応から、すでにジャンが彼女にそれを告げていたことを知る。

「……二人が駆け落ちしたらどうなるか、よく考えたのか？」

イレールの諭すような言葉に、アンジェリーヌは戸惑い、微かに首を横に振った。

イレールはフツと一息吐いた。

「まずブランシェ家は反逆者の家族としてその地位を剥奪。はっきり言って命の保障すら危ういだろ。陛下は王妃となる者に逃げられたことで今より更に立場が弱くなってしまふ。そしてそなた達には反逆者として追手が掛かるだろ。捕まれば二人ともまず死罪だ。殿下もそなたも想いが成就すれば本望かもしれないが、後に残される陛下の気持ちも考えて欲しい。自らの手で親愛なる弟と愛する女性に裁きを下さなければならぬ……その気持ちを」

イレールの言葉を聞いているうちに、アンジェリーヌは事の重大さを思い知り青ざめた。

家族も愛する人も、愛する人の家族さえも不幸に陥れてしまふ。

(ジャンはそれを知っていて私を選んでくれたというの?)

ジャンの激しく深い愛に、アンジェリーヌは彼の望む答えを分かっているながらも、それを選べなくなっていた。

「陛下はそなたを愛している。愛しているからこそ、そなたの幸せを願い、あのようなことを言ったのだ。自分のことは二の次で、そなたと殿下を幸せにするにはどうすればいいのか、それを第一に考えていらっしやる。そんな心優しい陛下の妻となれば、そなたはきっと幸せになれるはず。陛下ならそなたを幸福で包み込んでくれるはずだ。だからどうか王妃に……陛下の妻になって欲しい。陛下と共にこの国を支えて欲しいのだ」

イレールの告白はアンジェリーヌの心に追い討ちを掛けた。

初めて知るリュシアン的心。

(陛下が……私を?)

自分のどこがジャンだけでなくリュシアンまでも惹きつけたのか、アンジェリーヌには疑問だった。

下級貴族で絵を描くことしか取り柄がない。美しく着飾ることも品の良い振る舞いも出来ない。それなのに何故、と。

しかしイレールの告白が真実ならば、リュシアンは自分の立場を顧みず、愛する者の幸福を願ったことになる。

(もし本当なら、陛下はどんな思いで私との結婚を……私に触れないと言ったというの?)

アンジェリーヌの心がリュシアンの優しさと切ない胸の内に締め付けられた。

ジャンの熱く激しい愛。

リュシアンの穏やかな慈しみに満ちた愛。

二人の男性の愛の狭間で、アンジェリーヌは迷い揺れ動く己の心を自分ではどうすることも出来ず、ただ目の前のイレールを無言で見つめるのだった。

(9)

アンジェリー又はモンシエルジュリーの森の湖に来ていた。

辺りには誰もいない。湖へ流れる水の音と、時折風に揺れ木々がざわめく音以外は静けさを漂わせている。

リュシアンとの結婚を言い渡されてから調度丸一日が経過していた。

ずっと考えていた。何が皆にとって一番いい方法なのか。そして自分とジャンの将来のことを。

(本当は分かっている。もう出すべき答えが一つしかないことを。……でもジャンのことが忘れられない)

湖のほとりでアンジェリー又は片手でその水に触れた。揺れる水面に映る自分の顔がジャンの辛い顔とだぶる。

ジャンはたとえ命を絶たれようとこの愛を貫くだろう。そしてその想いはアンジェリーとも同じだった。

相手の想いに応えたい。それが死を分かち合うことになっても後悔はしない。

アンジェリーもまたそれほどまでにジャンを愛している。

ジャンと己の命だけで済むのなら、アンジェリー又はジャンを選んでいた。

しかしそれだけで終わりはしない。家族の命さえも絶たれてしま
うのだ。

アンジェリーヌには家族を見捨てることはどうしても出来なかつ
た。

家族への愛情はもちろん、代々続いてきたブランシエス家の誇り
を傷つけるような真似はしたくなかった。仮にも一度は後継者にな
った身。その責任の重さを肌で感じてしまったアンジェリーヌは、
ブランシエス家を守らなければという使命感すら抱いていた。

そしてもう一つリュシアンの心を裏切れなかったからだ。

優しく励まし、ジャンとのことを心から応援してくれたリュシ
ア。その彼の秘めた心を知り、アンジェリーヌはその想いにどう報
いるべきか迷った。

愛しているのはジャン、ただ一人。

リュシアンと結婚したとしても、きっとリュシアンは己の言った
通り表向きだけの妻として自分と接するだろう。

愛する人と結婚してそんな風にしか接することの出来ないリュシ
アンの心を思うと、素直にジャンと想いを交わせるはずはないと思
った。

もしジャンと交際を続けたら、イレールの言った通りこの兄弟の
関係にいつかヒビが入ってしまうかもしれない。他の貴族を巻き込
んだ派閥争いが起きてもおかしくはない。

仮にジャンと駆け落ちしたとしたら、リュシアンはどんな思いで命令を下さなければならぬだろう。それはリュシアンにとってこれ以上ない深い傷と悲しみとなって彼の心を苛むに違いない。

残される者達の苦しみ。それを考えるとアンジェリーヌにはどうしてもジャンを選ぶことは出来なかった。

（ジャンはきつと私を憎むでしょうね。……それでいいの。憎んで憎んで……そのうち私への愛が消えてしまえばいい。そうすればきつと彼はいつか他の女性を愛するようになるわ）

ジャンが他の女性を愛する。そうなるのが望ましいのに、アンジェリーヌは思うだけで胸が潰れそうになる。

（……何もかも忘れ、ジャンへの想いだけを抱いてこの湖に身を沈めることが出来たなら、どんなに救われることか）

この体を捨て魂だけ解放することが出来たなら。

しかし出来るわけがなかった。

もし自殺などしたらジャンは間違いなく後を追うだろう。そうなればリュシアンはどれほど己を責め苦しむだろう。

自分を愛してくれた二人の男性にそんな辛い思いをさせたくはなかった。それに家族にも迷惑を掛けてしまう。

「……………う……………う……………」

アンジェリー又は両手で地面に生える草を地面ごと強く握り締め
た。その瞳からは止めど無く涙が溢れ幾粒も零れ落ちた。

アンジェリー又は悟る。自分には死を選ぶこともすでに許されな
くなつたのだと。

許された道はたったの一本。

「うっ……あ、……あ……ああ！」

アンジェリー又は嗚咽を抑えるどころか声を挙げて泣かずにはい
られなかった。胸に堪る苦しみを、声を出すことで無意識に和らげ
ようとしていた。

しかし張り裂けんばかりの慟哭はいつまでもアンジェリーの胸
を苛み続ける。

（もう……もう二度とここへは来ない。この場所はジャンとの思い
出の場所、……愛を育んだ場所だもの。私にはもう来る資格はない
のだから！）

そこかしこに残るジャンとの日々がアンジェリーの心に浮かぶ。

忘れなければいけない思い出。

忘れなければならぬジャンとの愛。

熱く激しく愛されたアンジェリー又の胸に強烈に残されたジャン
との日々は、そう容易く忘れられるはずもない。

それ故アンジェリーヌの悲しみは深かった。

(ジャン……ジャン………ジャン！)

忘れられない愛しい人の名を、アンジェリーヌはただひたすら心の中で叫んでいた。

もう答えてくれないだろう彼の名を、それでも呼ばずにはいられなかった。

静かな森にアンジェリーヌの泣き声だけがいつまでも響いたのだ。

* * *

「宰相のイレール・ロ・ソシエル様にお取次ぎを……。アンジェリーヌ・ラ・ブランシエスが返事に来たとお伝え下さい」

宮殿に来たアンジェリーヌは入り口にいた執事の一人に声を掛けた。

アンジェリーヌは客室の一つに案内された。

執事がイレールを呼びにいつの間、アンジェリーヌは椅子に腰を降ろし静かに待っていた。

アンジェリーヌは瞳を閉じる。

(もう………戻れない)

モンシエルジュリーの森でそれこそ涙が尽きるほど泣いた。心が壊れると思った。壊れてしまえばいいとすら思った。

心を強く持つてここへやって来たはずなのに、今にも崩れそうになる自分の心を保つのがやっとだった。

アンジェリー又は両手をギュッと握り締め自分を支えようとしていた。

そうしているうちに、イレールが客室に到着した。

部屋に入ってきたイレールに、アンジェリー又は立ち上がり一礼する。

「……返事に来たそうだな」

イレールがアンジェリー又の心を探るようにつめた。アンジェリー又は震えそうになる喉を、深呼吸をして落ち着かせてから返事をする。

「はい。……シャルロ二世陛下との結婚、お引き受け致します。陛下の妻に……なります」

アンジェリー又は奥歯を噛み締め俯き、懸命に心を保とうとしていた。

イレールがアンジェリー又にそっと近づき、その肩に手を置いた。

「よく決心してくれた。そなたの思い、決して無駄にはしない。私も出来る限りの力で陛下のため、この国のために尽くす。もう二度

とそなたのような思いを誰にもさせたりはしない。そんな世の中を皆で創っていい。」

いつもと変わらない冷静なイレールの声。だが彼がアンジェリーヌを少しでも励まそうと言った言葉であることが彼女には伝わっていた。

「はい。……よろしくお願い……します」

アンジェリーヌは涙が出そうになるのを堪えながら、イレールに深々と頭を下げた。

「今日はこれからどうする？ 陛下にお目にかかり直接伝えるか？ また改めて会った方がよいか？ 言い辛いなら私から陛下と殿下に話をするが……」

リュシアンに直接返事をする。それよりも前にまず話さなければならぬ相手が誰なのか、アンジェリーヌには分かっていた。

「陛下へはイレール様の口から伝えて下さい。イレール様、……今からジャン殿下にお会いすること出来ますか？」

アンジェリーヌの言葉にイレールは躊躇する。

自分にさえ辛い思いに耐え言葉を口にした彼女が、最も辛い思いをして伝えねばならない相手に直接言う。彼女がその苦しみに耐えられるのであるのかと思つた。まさかそのまま二人で逃亡したりするのではないかという疑念さえ浮かんだ。

アンジェリーヌはそんなイレールに訴えかける。

「私の口から言わなければジャン殿下は納得しません。他の方が伝えても、殿下とその方とに溝を作ってしまうです。ですからジャン殿下に会わせてください。二人だけで話をさせて下さい。これで最後にします。……最後にもう一度だけ会わせて下さい！」

懸命に訴えてくるアンジェリーヌにイレールは自ら抱いた疑念を打ち消す。

アンジェリーヌの誠実な思いがイレールの胸に響いた。

「……………ついて来なさい」

イレールはアンジェリーヌをジャンの私室へ案内した。

部屋の中には誰もいない。ジャンは今公爵の屋敷に外出中とのこと。

「ここで待っていないさい。あと一時間もすれば殿下は帰ってくるだろ」

イレールはアンジェリーヌを一人残し、自分は勤めに戻ろうとする。

出ていく直前、イレールが扉を開ける手を止めアンジェリーヌを振り返った。

「アンジェリーヌ、最後の時間を大切に過ごすとよい。……………今日これからのことは誰も知らぬことだ。……………よいな？」

イレールは諭すように言った。

彼の意外な言葉にアンジェリー又は目を見開く。言葉に隠された意味が分かったからだ。

イレールはこの最後の時に、たとえジャンとアンジェリー又が逢瀬を交わそうと見て見ぬフリをすると告げたのだ。

イレールがそう言ったのはアンジェリー又の思いに心を打たれたからだだった。彼女の言葉に嘘偽りなどない。リュシアンとの結婚を決めた心を覆たりはしない。そのことでアンジェリー又の払った代償の大きさがイレールにもよく分かっている。ならば彼女のために出来る限りのことをしてやりたいと思った。

イレールは驚き戸惑うアンジェリー又を残し、今度こそ部屋から出て行った。

アンジェリー又はイレールから思ってもみなかった言葉を受け迷い悩む。

ジャンと契りを交わす。

たった一度だけ許された愛する人との最初で最後の逢瀬。

(ジャンに愛されたい。この先何があっても耐えられる思い出が欲しい。でも……)

ジャンと契りを交わしたら自分の思いを抑え切れなかった。周りのことが考えられなくなり、ジャンの胸に飛び込んでしまう気がした。

ジャンに自分の心を曝け出してしまつう。

そうなればジャンは間違いなくすべてを捨ててここから連れ去ろうとするだろう。そうならないようアンジェリー又は何と云ってジャンに伝えるべきか、どうしたらジャンが納得してくれるか考え込んだ。

だがどう伝えてもジャンを深く傷つけてしまうことには変わらない。

(どう言えばいいの……?)

アンジェリー又はただじつと椅子に腰掛け俯き考え続けた。

どのくらい時間が過ぎていたのかアンジェリー又は分からなかった。

物音一つしなかつた部屋に、突然扉を開ける音が響き渡る。

アンジェリー又はその音にハッと我に返り、反射的に椅子から立ち上がった。視線は扉に注がれ、その表情は話さなければならぬことで凍りついていた。

扉が大きく開き、この部屋の主ジャンが姿を見せる。ジャンもまた誰もいないはずの部屋に思いがけない人の姿を見つけ、動きを止めた。

「アン……ジェリー又?」

驚いたジャンだったが、彼女が何故ここにいるのか悟り、扉を閉めると真っ直ぐ彼女の許へ歩み寄って来た。

「答えが出たんだな？」

アンジェリー又はジャンの瞳から目を逸らし頷いた。

(ジャンの顔が見れない。……あの瞳を見て彼を拒絶することなんて出来ない)

アンジェリー又は両手でドレスを握り締めた。

「俺と……来てくれるか？」

説得するようなジャンの声がアンジェリー又の耳に届いた。

アンジェリー又は頷きそうになるのを懸命に堪え、必死な思いで首を横に振る。

彼女の反応が信じられないジャンはもう一度確認する。

「一緒に来てくれるな？」

アンジェリー又は泣きそうになるのを堪え、唇を噛み締めもう一度首を振った。

「何故だ!？」

熱く叫んだジャンはアンジェリー又の両腕を掴んだ。体を強張らせるアンジェリー又は、それでもジャンを見ることが出来ず俯き続

けていた。

「何故俺についてこない！ 俺より兄上を選ぶというのか!？」

アンジェリー又はジャンの激しい口調に決意が揺らぎそうになる。揺らぐ前に告げなくては駄目だと感じたアンジェリー又は喉の奥から絞るよつに声を出す。

「陛下と結婚……するわ」

「それがどういうことが分かっているのか!？ 俺達は一生日陰で逢うことしか出来なくなるんだぞ。それでもいいのか!？」

人の目から隠れるようにしてでもジャンと愛し合えることが許されるならそれだけでいいとさえ、今のアンジェリー又は痛いほど思った。そんな形の愛でも、叶うことなどもう遠い夢のよつに感じた。

(ちゃんと言わなければ……)

「私達……終わりにしましょう」

「何……言っているんだ?」

ジャンにきちんと伝えよつとアンジェリー又は真っ直ぐジャンを見つめた。

「私達別れましょう」

ジャンの瞳が大きく見開かれる。

「私は正真正銘の陛下の妻になると決めたの。身も心も陛下に捧げるの。陰であなたと逢ったりもしない。だからあなたもこんな私は捨ててしまつて！」

心を引き裂かれる思いで叫んだアンジェリーヌの瞳は涙で潤んでいた。

「嫌だ!!」

ジャンは掴んでいたアンジェリーヌの両腕を引き寄せ、強引に彼女の唇を奪った。

「んっ……」

アンジェリーヌはジャンから離れようとするが、ピクリとも体を動かすことが出来ない。

(ジャン止めて……。もう私のことは諦めて。お願い！)

息も出来ない口付けに、アンジェリーヌの心は徐々に追い詰められていく。

「お前だけは失いたくない！」

ジャンは力の限りアンジェリーヌを抱き締めた。想いの丈をぶつけられ、アンジェリーヌは涙が溢れた。

(ジャンを失いたくない。……まだこんなに愛しているのに！)

アンジェリーヌはジャンにしがみつきそうになる手をグッと握り

締める。

「離して。あなたも本当は分かっているはずよ。私達と一緒にいることで皆を不幸にしてしまう。別れるのが一番いい方法なのよ」

「他の者なんかどうなってもいい。俺はお前だけいれればいい！」

決して離すまいとするジャンにアンジェリー又は痛感した。自分がジャンを駄目にしてしまうと。

(このままじゃ彼の気高さを滅茶苦茶にしてしまう！)

アンジェリー又は自分の精一杯の力でジャンを引き離れた。

「あなたはこの国の王子なのよ。陛下が信頼を寄せる大切な存在なのよ。国を背負って立つ立場なのを忘れないで！」

「だから俺はすべてを捨てると……」

「捨てられるの？ この国が滅びてしまっても後悔しない！？ 逃亡して捕まれば陛下が私達を罰するのよ。兄にそんな辛い思いさせたいの！？ ……私には出来ない。家族の命を犠牲にすることも、陛下にそれこそ死ぬより辛い思いをさせることも、私には出来ない！！」

苦しみを吐き出すようにアンジェリー又は叫んだ。

ジャンの心にはアンジェリー又は放った言葉が突き刺さっていた。

産まれた時から一心同体に過ごしてきた日々が不意にジャンの胸

に蘇る。喜びも悲しみも悔しさも、すべて分かち合って生きてきた双子の兄リュシアン。その兄に死よりも辛い苦しみを与えてしまう。それでもなおジャンはアンジェリーヌへの想いを絶ち切ることが出来ない。

ジャンはアンジェリーヌを抱きかかえ、寝室に運びベッドに横たえた。

「ジャン……ん？」

アンジェリーヌはジャンの思い詰めた顔を見つめ呟いた。自分の身に何が起ころうとしているのか把握しきれていなかった。

ジャンの体が横たわるアンジェリーヌに折り重なってくる。その唇がアンジェリーヌの唇を覆い、首筋に降りて来た。

その瞬間、ようやくアンジェリーヌはジャンの行動の意図を知る。

「ジャン、止めてー！」

アンジェリーヌは逃れようと叫んだ。今ジャンに抱かれたら決意がなし崩しに崩れてしまう。ジャンと離れられなくなってしまふ。

「いやっ、……やめ……てー！」

両手を抑えつけられてなおアンジェリーヌは懸命にもがくが、どうすることも出来ず、ただ涙が溢れるばかりだった。

「……………っ」

アンジェリーヌの頬に雫が落ちてきた。

それは自分のものでない涙。

アンジェリーヌはその持ち主の顔を悲痛な思いで見つめずにはいられなかった。

「どうすればお前を失わずに済む？ ……どうすれば誰も苦しめずに済む？」

ジャンは静かに涙を零しながら言うと、アンジェリーヌから手を離し体を起こした。

声を押し殺し泣き続けるジャンに、起きあがったアンジェリーヌは思わず彼の頬に触れようと手を伸ばす。

「もう……行け」

突き放す一言にアンジェリーヌの手が止まる。

「行ってくれ！」

俯き目を覆ったジャンが叫んだ。もう決してアンジェリーヌが自分のものにならないと悟ったのだ。

「俺の前から消えてくれ！！」

ジャンの魂から放たれた叫びが鋭くアンジェリーヌを切り裂いた。別れを望んだはずなのに、その衝撃は計り知れないほど大きいもの

だった。

「ごめ……な………ん」

言葉にならない言葉を残し、アンジェリーヌは寝室から飛び出し
後ろ手でその扉を閉める。部屋中にその大きな音が響いた。

（傷つけた。……傷つけてしまった。誰より大切なあの人を！）

アンジェリーヌの瞳からは止めど無く涙が溢れていた。

その彼女の耳に微かに扉の中のジャンの声が届いた。……押し殺
しきれないジャンの悲痛な泣き声が。

アンジェリーヌは思わず引き返しそうになる手を握り締めた。そ
してジャンの私室から駆け出し扉を閉めるとそのまま扉に背中を預
けた。

（もう戻れない。……本当に終わってしまった）

こんな風に傷つけたくはなかった。愛しているのに傷つけてしま
った。

ジャンの涙がアンジェリーヌの胸に激しい痛みとなって刻まれて
いた。

（ジャン、ごめんなさい。……ごめんなさい！）

「……っ……っ」

アンジェリーヌの心にジャンとの思い出が次々と浮かんだ。やがてそれはジャンの涙に濡れた顔に変わった。

「あああつ……」

アンジェリーヌは両手で顔を覆うとその場に泣き崩れた。

(……………ごめんなさい!)

ジャンに届かない声をいつまでも心の中で叫び続けた。

アンジェリーヌがリュシアンと結婚したのはその一か月半後のことだった。

「まさかこのような形で娘の肖像画を描くことになるうとは……」

ロドリグが寂しげに呟いた。

ここは宮殿の一室。王家が客人を招く部屋である。

部屋には二人だけ。気を遣ったリュシアンが実の親子である二人に時間を与えてくれたのだった。

「いや、もう私の娘とは呼んでいけなかった。今お前は公爵家の娘、そして王妃となったのだから」

父の言葉にアンジェリー又は寂しそうに微笑んだ。

「私は今でもロドリグ・ラ・ブランシエスの娘よ。……心の中では永遠にあなたの娘です」

ロドリグは娘の思いに心を打たれた。それを隠すように画材道具を片付けていく。

やがて片付け終えたロドリグは立ち上がり、部屋から出ていこうと扉へ歩み始めた。アンジェリーも父を見送ろうと立ち上がった。

するとロドリグが不意に振り向いた。言い残したことを思い出したかのようにならぬように。

「……今、幸せか？」

娘を氣遣う父の優しい言葉だった。

ロドリグは仕来りに縛られ慣れない上級貴族達と過ごす王家の生活に、娘が耐えているのではないかと案じていた。

しかも夫となったのは最初聞かされていた第二王子のジャンではなく、王位を継いだリュシアンだったことも気に掛かっていた。何故相手が変わったのか、アンジェリーヌからは王家の機密事項だからと教えてもらえなかったが、娘の浮かない様子で心ならずも王妃となってしまうたのだろうと察することは出来た。

「私…… 幸せよ。安心して」

父の優しさに背くまいと、アンジェリーヌは微笑んで答えた。

「ならいいが……。もし耐えられなかったらお前の好きに生きていいのだぞ。家のことは心配しなくていい。娘が幸せでいてくれるのなら、親はそれでいいと思うものだ」

ロドリグはそう言い残し帰って行った。

（お父様、ありがとう）

父親の心にアンジェリーヌは感謝した。その言葉が嬉しかった。言葉だけで充分だった。

アンジェリーヌは自分の選んだ道が引き返すことが出来ないものだと身に染みて分かっていた。

アンジェリー又は窓際に寄り、外の穏やかに晴れ渡る景色を見つめた。

結婚の儀式から一か月半。

アンジェリー又はまだ乙女のままだった。

初夜、アンジェリー又の部屋にリュシアンはきちんとやって来た。だが周りの者の目を騙すだけのもの。打ち震えるアンジェリー又に、リュシアンは触れることはなかった。

それからも体裁を保つために時々アンジェリー又の部屋に来るが、話をするだけでベッドを共にした事は一度もない。

イレールから本当の妻になることを受け入れたと聞いている筈なのに、リュシアンは決してアンジェリー又に触れようとしなかった。

リュシアンは言う。

「私はまだ諦めていない。いつかきつとそなたをジャンの許に返してやる」と。

リュシアンの胸の内を思うとアンジェリー又は切なかった。

愛する者のすぐ傍にいながら、自分の心を押し殺し、ただひたすらその者の幸福を願い続ける。

アンジェリー又はリュシアンの深い慈しみ溢れる愛を感じ、彼の想いに応えなければと思っていた。だがジャンとの別れの心の傷が癒えていない今はまだ、彼の想いに応えることが出来そうにはな

った。

思い出されるモンシエルジュリーの森で過ごした愛に満ちた日々。そして別れの時のジャンの涙溢れる姿。

締め付けられる思いがするのにな、アンジェリーヌの心にはジャンへの想いが溢れんばかりである。

もう二度と取り戻せない日々と分かっているながらも、アンジェリーヌはその思い出から抜け出せないでいたのだった。

一方ジャンとはといえば宮殿には必要最小限いるだけで、もっぱら離宮の一つに身を寄せていた。王家が揃ってする夕食にも顔を出すこともない。

傷つけあい別れたアンジェリーヌと顔を合わせなくなかったのだ。兄の妻となった彼女とどう接したらいいのか分からない。たまに会うだけでも心の傷が疼く。

アンジェリーヌと別れてから彼女と言葉を交わしたのは数えるほど。それも公式の場ばかりだ。体面上仕方なく会うこと以外、ジャンは意識的に宮殿から遠ざかっていた。

毎夜アンジェリーヌのことが浮かぶ。今頃リュシアンと夜を共にしているのかもしれないと思うとジャンは苛立ち、嫉妬心を抑えられず、それから逃れたいばかりに酒に溺れ、時には娼館に向くとすらあった。

忘れない。

なのに頭から離れないアンジェリーヌの姿。

苦しみもがくジャンは今宵も離宮で大量の酒を呷っていた。

「殿下、少しは控えて下さい」

いつの間にか部屋に入ってきていたイレールが、グラスに注ごうとしていた酒の入ったボトルをジャンの手から取り上げた。

「イ……レール……か」

ジャンは虚ろな瞳をイレールに向ける。

「俺に構うな。……放っておけ」

「そうは参りません。こんなことを続けていたら体を壊しますよ。陛下も殿下のことを気にしてこうして私を遣わしたのです。宮殿に戻って下さい」

（戻る……だと？）

ジャンの心が激しく拒絶した。その反動で手にしていたグラスが握力で割れた。ジャンの手から見る見るうちに血が滴り落ちる。

「殿下、手当てを」

イレールの差し伸べた手をジャンは逆の手で払い除ける。

「俺に構うな！……見ろというのか？ 兄上とアンジェリーヌの仲睦ましい姿を見てこれ以上俺に耐えろというのか!？」

ジャンは椅子から立ち上がると前方の壁に割れたグラスを投げつけ、両の拳をテーブルに叩きつけた。

「くそっ！……どんなに酒を飲んでも酔えない。女を抱いてもアンジェリーヌの泣き顔が浮かんで罪悪感しか残らない。この苦しみがお前に分かるか！？」

吐き出されるジャンの苦しみに満ちた胸の内に、イレールはこう仕向けたのは自分なのだと胸に刻む。国のためとはいえ、二人の純粹な想いを引き裂いた。二人は想いが遂げられれば死ぬのも本望だったろうと。

アンジェリーヌのことはリュシアンがその心の傷を癒してくれるだろう。ジャンを助けるのは自分の役目なのだとイレールは思った。

「殿下、一つ縁談話があります。相手はハンドラ王国の第一王女です」

イレールの思いがけない話に、ジャンは訝しげに顔を上げた。

ハンドラ王国には王子が一人もいない。だから第一王女の夫ともなればそれは後の国王を意味する。妻を迎えるのではない。この国を離れ相手の国で生涯を終えるということ。

「この国にいて辛い思いにじっと耐えるよりも、いつそのこと距離を置くのがいいのかもしれませんが。何も陛下の傍でしか王子としての役目を果たせないわけではありません。この縁談は二国間の絆を強固なものにするでしょう」

イレールの言うことは最もだと思った。

ずっと兄の片腕になりたいと思ってきた。それなのにこのままでは兄に対して憎しみすら抱くようになってしまふ。そうなる前に離れるのも一つの方法だと思った。

アンジェリーヌとの愛を失った今、誰と結婚しようと同じことだった。一人身で一生を終えても構わなかった。だが国の役に立つならばそれもいいだろうと、ジャンはふと思った。

「分かった。……その話進めろ」

ジャンは投げやりにイレールに答えたのだった。

*

*

*

イレールは次の日、政務の間に来て。中にはリュシアンと事前に声を掛けたアンジェリーヌもいた。

「イレール、私達に話があるようだが何だ」

リュシアンが書類を机に置き、イレールに目を向ける。アンジェリーヌは机の近くの壁際のソファアに腰を降ろしていた。

イレールは歩み寄り机の前に立った。

「はい。ジャン殿下のことですが、ハンドラ王女との結婚を承諾しました」

(えっ……結……婚?)

アンジェリーヌの胸が締め付けられたように痛んだ。

ジャンが他の女性と結婚する。いつかはその話が出るだろうと覚悟はしていた。

すでに他の人と結婚した身だというのに、アンジェリーヌの心は掻き乱された。

ジャンの幸せを願う心に嘘はない。だがそれでも心は痛み続けるばかりだ。

「ジャンにあの縁談を話したのか？ まだ話すなと言ったではないか」

アンジェリーヌは反射的にリュシアンを見た。リュシアンが知っていたことに驚いたのだ。

国王であるリュシアンが知らないはずがないのだ。

（私のために黙っていてくれたのだわ）

いつかジャンの許へ返すと言ってくれたリュシアンが気遣い知らせなかったのだ。

「しかし陛下、ジャン殿下は王后陛下を失ったことで苦しみ続けています。距離を置くことが、その苦しみから解かれる方法だと思います」

「私はまだジャンとアンジェリーヌのことを諦めたわけではない。

この話は私の方から断りを入れておく。イレール、先走ったことはしないでくれ。それから今すぐここへジャンを呼んで来てくれ。よいな？」

「……はい、畏まりました」

リュシアンに命令されたイレールはそれ以上何も言わず、言われた通りジャンを呼びに部屋を出て行った。

「アンジェリーヌ」

いつの間にかリュシアンが目の前に立っていた。アンジェリーヌは動揺を隠しきれない瞳でリュシアンを見た。

「案ずるな。ジャンをどこにも行かせはしないから」

リュシアンの温かい言葉が嬉しくもあり、また心苦しくもあった。

リュシアンの自分の心を顧みることなく注いでくれる優しさが、アンジェリーヌの胸に染みる。

（陛下はすべてを犠牲にしても、私とジャンのために尽くそうとしている）

そこまでさせようとしている。

一国の王がそのようなことを犯せば、それは暴君と同じこと。

アンジェリーヌはリュシアンの優しさが分かっているからこそ、彼にそんなことをさせたくはなかった。

「陛下、もう私達のことでは無理はなさらないで下さい。私は覚悟を決めて嫁いできたのですから……」

「そなた達のためだけではない。私のためでもあるのだ。私は誰にも神の血の犠牲になって欲しくないと思っている。そのために出来る限りのことはやっておきたいのだ」

リュシアンはアンジェリーヌに諭すように語りかけた。

アンジェリーヌはリュシアンにそれ以上言葉を返すことはなかった。リュシアンがそう決意しているのであれば、何か言ったところでそれを止めることは無理だと思ったからだ。

どれほどの時間が過ぎただろうか。

イレールが伯爵と談話中のジャンを捕まえ連れて戻って来た。

アンジェリーヌとジャンの視線が一瞬交わった。それだけでアンジェリーヌの心にはジャンへの愛しさが込み上げる。

ジャンは心構えもなしにアンジェリーヌと会い、思わず顔を逸らしてしまった。何事もないフリをするように、ジャンはリュシアンの傍に歩み寄る。

「兄上、用件があるなら手短かに言ってくれ」

感情を押し殺したジャンの低い声に、部屋中に緊迫した雰囲気の流れた。

早くアンジェリーヌのいるこの部屋から離れたい。

ジャンの思いがアンジェリーヌの心の傷を抉る。彼の閉ざされた心が、自分が彼に与えた傷の大きさなのだ。アンジェリーヌは思った。

リュシアンはそんなジャンを叱咤するかのように見た。

「縁談は私が断っておく。今お前が結婚してしまえば、アンジェリーヌをお前の許へ返すことが不可能になるからな」

「不可能になる？ …… アンジェリーヌはすでに兄上のもの。とっくに不可能ではないか！」

「言ったはずだ、彼女とは表向きの結婚だと。いつか必ず彼女とお前を結婚させると」

ジャンは一瞬驚いた。アンジェリーヌがまだリュシアンに抱かれていないと知ったからだ。だがいくらリュシアン一人が頑張ったところで未来が変わるとは思えなかった。

「いつかだと？ そんなのは夢幻だ。アンジェリーヌもそれが分かっているから俺を捨てて兄上と結婚したんだ。兄上ほどの人が国の実状を分からぬはずがないだろう！」

「それでも私は諦めない。アンジェリーヌに約束したのだ、必ずジャンの許に返すと」

「俺はもう今の状態に耐えられない。さっさと縁談を進めてくれ！」

ジャンの吐き捨てた言葉で、リュシアンは彼の絶望感がどれほど深いものかようやく悟った。そしてアンジェリーヌの傷も同じくらい深いものだとも。

自分のために他人が心の中で血を流し続けている。それを救う術が傷つけた自分にはないのかと、悔しさがリュシアン胸に込み上げた。

「いつそのこと、私とお前入れ替わることが出来たなら……」

見かけはほとんど同じ。ジャンの代わりに自分がハンドラ王国に行き、自分の代わりにジャンが王となりアンジェリーヌと結ばれることが出来たなら。

無理なこととは知りながら、悔しさから言葉が口について零れた。

「何を馬鹿なこと言っているんだ兄上。いくら見かけが同じでも髪型も瞳の色も性格だって違う。第一俺には神の血がない。そんな俺が兄上の身代わりになれるはずがないだろう！」

ジャンの驚き捲くし立てた言葉にリュシアンは唇を噛み締める。

分かっている、出来る筈がないことだと。それでも言わずにはいられなかったのだ。

誰よりも幸せになって欲しい二人が、自分のせいで引き離され苦しみ続けている。

「こんな神の血などなければ……」

そうすれば誰の運命も狂わされることはなかった。ジャンもアンジェリーヌも母親もカミーユも。

(この印のせいで！)

思い詰めたリュシアンは額飾りを外し捨てると、懐から護身用の短剣を抜いた。

ジャンもイレールもアンジェリーヌも、リュシアンの行動に反応が一瞬遅れた。

「兄っ……」

ジャンが手を伸ばしたが、僅かにタイミングが遅かった。

「陛下！」

イレールが叫ぶ。

アンジェリーヌは目を見張ってリュシアンを見つめた。

リュシアンの額から鮮血が溢れ滴り落ち、彼の衣服を濡らし、床にもその雫は落ち続ける。

リュシアンは自らの手でその額を切りつけたのだった。

神の血を消し去ってしまった。しかし額は切り裂けても、神の血は剣の刃が当たったにもかかわらず傷一つ付いていなかった。

リュシアンはそれでも心が静まらず、もう一度短剣を振りかざす。

「兄上！」

ジャンがリュシアンから短剣を力づくで取り上げた。

「陛下、傷の手当てを」

イレールが応急処置をしようとするが、リュシアンはその手を払い額に手を当て俯いた。

「神の血など……こんな印などいらぬ。愛する弟を、愛する女性を苦しめるだけの印などいらぬ……！」

リュシアンは抱えていた思いを吐き出すように叫んだ。

普段物静かなリュシアンの激しい声に、ジャンもアンジェリーヌもはっとした。自分達だけが苦しいのではない。リュシアンもまた犠牲者の一人なのだ。

ジャンは兄のアンジェリーヌに対する想いを初めて知った。自分と同様に彼女を愛しているのだと。妻のアンジェリーヌを抱くこともなく、ただひたすら愛する者たちの幸福を願っていたのだと。

神の血の持ち主というだけで血筋に関係なく国王を継がされ、国のすべてをその身に背負い込み、さらには紅の女神というだけで結婚させられてしまった想いを寄せる女性の受けた心の傷さえもその身に背負い込み、たった一人で耐えてきたリュシアン。

彼の抱え込んだ苦悩の大きさに、ジャンは初めて触れた気がした。

そして自分の愚かさを悟った。リュシアンもアンジェリーヌも耐えている。それなのに自分だけ逃げ出そうとしていたのだと。

「兄上、結婚話は断ってくれ。……この先もずっと」

ジャンは呟いた。

ジャンは兄のリュシアンと共にこの国のためにこの身を捧げよう、王子としての役割を果たしていこうと決心した。

そして一生結ばれることはなくとも、アンジェリーヌを心の妻として生涯愛し抜こうと心に誓いを立てたのだった。

一方アンジェリーヌは己を責めずにはいらなかった。気高いリュシアンをこんな目に合わせてしまったのは、自分がジャンへの想いを断ち切れていなかったからだ。

それなのにこうなった今でさえも、ジャンを愛している自分の愚かさを罪深く感じていたのだった。

アンジェリーヌの十六歳の誕生日が間近に迫っていたある日のこと。

アンジェリーヌは私室で紅茶を飲みながら束の間の自由な時間を過ごしていた。

同じテーブルには彼女の身の回りの世話を任されているジルダ・ロ・クローデルもいる。

ジルダはクローデル伯爵夫人であり、アンジェリーヌよりも七歳ほど年上ある。

王妃の世話係ともなればそれなりの地位の女性が勤めるもの。そこで人柄のよいジルダに白羽の矢が立ったのだ。人選はリュシアンが行った。アンジェリーヌに最良の人をつけたかったのだ。ジルダは伯爵夫人として家にいるよりも、一人の人間として自立してみたいと思っていたので快くこの話を承諾した。

気取らず裏表のないジルダに、アンジェリーヌは彼女に対し姉のような気持ちを抱くようになっていた。

宮廷に親しい女友達のいないアンジェリーヌにとってジルダの存在は大きかった。そこで私室でもこうして同席させるほどジルダを大切に扱っていた。

人前では王后陛下と呼ばれるアンジェリーヌも、プライベートではジルダから「アンジェリーヌ様」と呼んでもらっている。ジルダ

も初めは王妃であるアンジェリーヌを皆と同じに王后陛下と呼んでいたが、アンジェリーヌ自身が望んだためプライベートでは名前で呼ぶようになっていた。

アンジェリーヌが素の自分に戻れる数少ない人物、それがジルダであった。

「アンジェリーヌ様、私手紙を一通預かっていますの」

そう言ってジルダは白一色の封筒をアンジェリーヌに手渡した。

アンジェリーヌは受け取ると封筒の表裏を見る。表には「親愛なる王后陛下様」とあり、裏にはよく知っている人物の名が記されていた。

「ブランシエス男爵……お父様からだわ」

アンジェリーヌは嬉しそうに微笑んだ。

「そつえばアンジェリーヌ様の実のお父様でしたわね」

男爵の娘であるアンジェリーヌに対して、伯爵夫人のジルダは決して見下したり冷たく当ったりはしない。本来なら格下の身分であるアンジェリーヌに仕える立場ともなれば快くは思わないのが当然だが、ジルダは身分の上下よりも人間の本質を大切に思う人柄だったのでアンジェリーヌに対しても親身になって仕えていた。

「ジルダ、お父様にお会いしたの？ 元気そうだった？」

「ここ一か月ばかり会っていないアンジェリーヌは、様子が知りた

くてジルダに尋ねた。

「いえ、私も人づてにお渡しするよう頼まれただけです。男爵の姿は見ていませんの。ごめんなさい」

ジルダは申し訳なさそうに答えた。

「そうなの……。もしお父様の姿を見かけたら、どんな様子だったか私に教えてね」

「ええ。必ずご報告致しますわ」

アンジェリーヌとジルダは顔を合わせると互いに微笑んだ。

封筒を開けようとしたアンジェリーヌの手がふと止まる。

父の名の横に一言記されていたからだ。「一人の時に読むように」と。

(何かしら?)

人に知られてはならないような内容なのだろうかと思った。あの厳格な父が、表向きは他人となった娘に手紙を書いてよこすとは、考えてみればどうもピンとこないことだった。

(家に何かあったのかしら?)

何故だか不安が胸をよぎる。

「アンジェリーヌ様、どうかなさいました?」

先ほどの嬉しそうな笑顔と違って変わった浮かない表情のアンジェリーヌに、ジルダが心配そうに声を掛けた。

アンジェリーヌは俯いた。

何を書いてあるのか早く知りたい。だから一人にして欲しいとジルダに言ってもいいだろうか……と。

「あの……ジルダ、これ……」

アンジェリーヌは戸惑いながら父からの手紙をジルダに差し出した。ジルダは封筒に書いてある言葉でアンジェリーヌの心を察し席を立った。

「私少し席を外します。何かありましたら私室にいますので」

そう言つとジルダは宮殿に用意されている自分の私室へと向かった。

ジルダの姿が消え部屋に一人になると、アンジェリーヌは緊張の面持ちで封を開けた。

きっと大した用件ではない。心は自ずとそう願っていた。

中にはこれもまた封筒と同じ真っ白な便箋が一枚だけ入っていた。

アンジェリーヌは中から取り出し、広げ、文字を目にする。瞬間アンジェリーヌは真っ青になり、ショックから便箋を握り締めた。

「お…父…様……」が

いてもたってもいられず立ち上がったアンジェリーヌだが、足に力が入らず床に膝から崩れ落ちてしまった。

(どづ……して?)

アンジェリーヌの頭は混乱し、瞳は愕然と一点を見つめていた。

便箋に書かれていた言葉。

『父親の命を助けて欲しくば翌朝サーボワールの森へ一人で来られたし。このことを他人に漏らした場合、来なかった場合は父親の命はない』

父ロドリグが何者かに誘拐されたのだ。

何の目的でロドリグを誘拐したのか、アンジェリーヌは動揺し混乱した状態の頭で考える。

(…王家の財産欲しさから? いいえ、私には自由に出来る財産など多くはない。それならば私を誘拐して陛下に要求する方が高額を狙えるはず。…狙いは私自身、私の命ということ? 本来なら王妃に相応しくない私がその地位についたことを快く思わない人物が、私を排除しようとしているの…?)

きっとそうだと思った。他に思い当たることが浮かばなかった。

自分の考えが合っているのか間違っているのか自信などない。た

だ一つはつきりしているのは自分一人で父を助けに行かなければと
いうことだけ。

(私のことでお父様を巻き込みたくはなかったのに……)

リュシアンとの結婚を選んだのも家族を失いたくなかったから。
それなのにまた自分のために家族の命を危険に晒してしまったこと
に、アンジェリーヌの心は痛んだ。

そして思う。たとえ自分はどうなっても父の命だけは守りたいと。
アンジェリーヌは次の務めの始まる前までに懸命にこのことを悟
られまいといつも通りの自分を保つ。

誰にも知られてはならない。

父の命を守ろうと、アンジェリーヌの心は必死だった。その必死
さがリュシアンにもジャンにもイレールにさえも、彼女の異変を感
じさせることなく一日が過ぎていった。

その間再びジルダと二人になったアンジェリーヌは彼女に一つ頼
み事をしていた。就寝前までに男物の服を一着用意して欲しいと。
それもできれば質素な物をと。

聞いたジルダは一瞬何故かと思った。アンジェリーヌがそんなこ
とを頼んだことなど一度もなかったからだ。しかしきつと今夜一晩
リュシアンがこの部屋で過ごすから、明日着る物を用意して欲しい
という意味なのだろうと思ったのだった。

王家に嫁ぐ前ならアンジェリーヌも動きやすい服の一着や二着は

持っていた。しかし王妃となつてからはもっぱらドレスのみを着用している。そんな格好ではとても宮殿の外に出られない。

ましてやサーボワールの森はモンシエルジュリーの森と調度宮殿を挟んで反対側に位置しており、馬でないととても行けない距離だ。

しかもアンジェリーヌがまだ一度も行ったことのない未知の場所。女一人で行くには変装しないで行くことが出来るような場所ではないと思つたのだ。

幸い今夜リュシアンはアンジェリーヌの部屋へ来ることはない。昨夜来たばかりだからだ。相変わらず他愛のない話をしてベッドを共にすることのない夜を過ごしている。リュシアンが部屋を訪れるのは大体三、四日置き。昨日の今日で来るはずはないと思つたのだ。

アンジェリーヌはシルダに用意してもらつた服を目の前に、その夜は一睡もすることなくただ椅子に座つてじつとその時が来るのを待つていた。ひたすら父親の無事を祈りながら……。

やがて窓の外の景色が夜の闇から徐々に白みを帯びてきた。夜が明け始めたのだ。

アンジェリーヌは立ち上がり、髪は後ろに一つに縛り服を着替える。リュシアンのサイズで作られた服はアンジェリーヌには大きかったが、そのおかげで襟で顔が隠れたので都合がよかった。

アンジェリーヌは自分の部屋からそつと抜け出し馬屋へ向かった。

宮殿には夜明け前とあつてまだ人は警備の者がいるだけ。誰も王妃のアンジェリーヌが外へ出ようとしていることなど気づきもしな

い。

アンジェリー又は馬を一頭連れ出し騎乗すると門へ馬を走らせた。
門は閉じられている。

アンジェリー又は門番に開門を命じる。王妃だと気づかれないう声を低く発し、義理の父である公爵の遣いだと告げると、門番は公爵の名に逆らえず門を開けた。

アンジェリー又は夢中で馬を走らせた。

父を助けるためならば自分はどうなってもいいと、まるで呪文のように繰り返し心の中で唱えていた。

一度も来たことのない地域であることが災いして、途中道に迷ってしまった。そうこうしているうちに夜が完全に明けてしまい、街にも人が行き来し出した。

アンジェリー又は焦る。道に迷っている場合ではないのにと。

仕方なく道行く人に尋ね、馬を全力で走らせた。

(間に合って！)

アンジェリー又はようやく着いた森の中を、父の姿を捜しさが迷った。

(どこ？ ……どこにいるの、お父様！)

アンジェリーヌの心は焦りを増すばかり。

「お父様！」

堪らず声に出して呼び掛けた。何度か呼びながら馬を駆けさせていると、大きめの洞穴に出くわした。

アンジェリーヌはその入り口に立つ人影を見つけ凍りついた。

そこには後ろに手を縛られ剣を突き付けられ身動きを封じられた父ロドリグがいたのだった。

*

*

*

宮殿では西の塔の教会で毎朝王家が行っているこの国の繁栄の祈願と先祖への祈りが始まるうとしていた。

ジルダがアンジェリーヌを呼びに来ると、部屋はもぬけの殻。

ジルダはアンジェリーヌがリュシアン部屋の部屋へ出向いているのだと思い、リュシアン部屋の部屋へアンジェリーヌを迎えに行く。彼女を連れ戻り、朝の身支度を手伝うために。

だが事態はジルダの予想を覆すものだった。

「王后陛下はこちらにいらっしやらないのですか？ お部屋にいなものですからついこちらにいらっしやるものとはかり……」

リュシアンはジルダの言葉に怪訝そうな顔をする。

「部屋にいない……？」

こんな朝早くから一体どこへ行く用事があるのだろうか。

リュシアンは嫌な予感がした。

「もう一度アンジェリーヌの部屋へ行ってみよう。戻っているかもしれない」

リュシアンに促されジルダは彼の後についてアンジェリーヌの部屋へ向かった。だがやはりアンジェリーヌの姿はない。

「ジルダ、アンジェリーヌはどこへ行くとか言っていなかったか？」

「いえ。特別には何も……」

ジルダはアンジェリーヌと交わした会話を必死で思い出すが、今日どこかへ行くからとは何も聞いていないと思うばかり。

「変わった様子はなかったか？」

聞いたリュシアンもアンジェリーヌはいつもと同じだった気がしていた。

ジルダも首を傾げる。

「変わった様子はなかったと思います。……変わったことといえば、王后陛下の实のお父様から手紙があつて喜んでおられたこと。そうですね、男物の服を一式用意して欲しいと……。私てつきり陛下がお召しになるとばかり思っていましたたけれど違ったのですか？」

リュシアンは訝しげにジルダを見た。

アンジェリーヌに服を用意して欲しいと言った覚えはない。彼女は何故そんなことをジルダに頼んだのだろうか。ジャンにでも用意したのだろうかと思った。

「ブランシエス男爵の手紙には何が書いてあったのだ？ 喜んでいたらそうだが」

「いえ、私は何も存じません。手紙には一人で読んで欲しい旨が書かれてありましたので、私は席を外していました。ただ手紙を受け取った時は嬉しそうでしたが……」

リュシアンは寝室に入るとベッドを見た。昨夜そのベッドを使った形跡はない。リュシアンはふとベッドの脇の台にある白い封筒を目にした。

「これが男爵からの手紙か」

これが原因かもしれない。そう直感したリュシアンはアンジェリーヌの了解もなしに私物を見ることを一瞬躊躇ったが、そうもいつていられない状況に便箋を取り出す。

リュシアンは内容を知ると息を呑んだ。アンジェリーヌの命が危険に晒されていると知ったからだ。

「この手紙は誰から受け取った？」

「クレール伯爵からですわ。でも伯爵も頼まれたただけだそうです」

誰が首謀者なのか、この手紙からでは分からない。痕跡を残さぬようあえて真っ白な物が使われたのだろうと思った。

「ジルダ、イレールをすぐジャンの部屋へ呼んでくれ。大至急だ、よいな！」

「は、はいっ」

リュシアンは命令に驚きつつも、ジルダは慌てて駆け出しに行った。

リュシアン自身もジャンの私室へ急ぐ。

男爵ごとき娘が王妃へ就いたことへのアンジェリーヌの抹殺か。それとも紅の女神である彼女を抹殺し、本来なら後継ぎではなかった神の血を持つこの自分を排除するためか。

(どちらにしてもアンジェリーヌが危ない！)

「ジャン、いるか!？」

早朝から大声で駆け込んできたリュシアンにジャンは驚いた。

「兄上？ そんなに急かさなくても朝の祈りにはちゃんと出るから」

リュシアンが朝の祈りに出るよう言いに来たと思ったジャンは、もう用意出来ているとばかりに身支度を整えた姿で振り返った。そんなジャンにリュシアンは厳しい表情でつかつか足早に歩み寄ってくる。

「アンジェリーヌの命が危ない」

突然予想外のことを告げられジャンは眉を顰めた。

リュシアンはジャンに手紙を突き付ける。

「こ……これは、何故こんなことに？」

ジャンは顔を強張らせた。

リュシアンは頷く。

「ブランシエス男爵を利用してアンジェリーヌを抹殺するつもりだ。恐らく王妃としてのアンジェリーヌを邪魔に思うものか、神の血の持ち主の私を消すために紅の女神をまず排除しようと考えている者が仕組んだのだろう」

リュシアンの言葉を聞き終わらないうちにジャンは剣を掴んだ。
愛する者を守るために。

「朝の祈りなんてやっている場合じゃない。すぐサーボワールへ行
く！」

その時ジルダに呼ばれたイレールが姿を見せた。

「イレール、アンジェリーヌが誘き出された」

リュシアンは手紙の内容を手短にイレールに言った。イレールはアンジェリーヌの身が危険に晒されていると瞬時に察知した。

「私はジャンと共にアンジェリーヌを助けに行く。イレールは首謀者を捜し出せ。ただし大事にはするな、よいな！」

「陛下お待ち下さい。陛下自ら行かれるのは危険です。ここはジャン殿下と兵を出して……」

「私が行かなくてどうする！ 彼女を王家の事情に振りまわした上に命の危険に晒せてしまったのは私のせいだ。私が彼女を守らなければならぬ。それに紅の女神を失うことはそなた達大臣にとつても望まざることはないか。もしかしたら神の血の力が必要になるかもしれない。私を止めるな、イレール！」

「しかし陛下の身に何かあれば……」

「私の代わりにはカミーユがいる。だが私にとっての紅の女神はアンジェリーヌただ一人。もう時間がない。行くぞ、ジャン！」

有無を言わせないリュシアン言葉に、イレールはもはやリュシアンを止めることは自分には出来ないと観念した。

幼き頃より仕えてきたが、ここまで自分の意見を強引に押し通すことは、ジャンならともかく穏やかなリュシアンにはないことだった。それほどまでにリュシアンがアンジェリーヌを愛していることも、イレールは今更ながら分かった気がした。

イレールは宰相として国王であるリュシアンを止めるべきだと分かっていた。だがリュシアンの内に秘めたアンジェリーヌへの深い愛と彼女に向けられた刃への怒りを前に、彼の行動を一人の人間として止めるべきではないと思った。

そんなイレールの肩に、リュシアンに続いて部屋を後にしようとしていたジャンがすれ違い様に手を置き囁くように言う。

「イレール安心しろ。いざとなったら俺が盾になっても兄上とアンジェリーヌを守るから。……必ず」

そのまま急ぎ出て行ったジャンをイレールは意外な思いで振り返った。ジャンの言葉が今まで感じたことのないほど頼もしかったからだ。

アンジェリーヌへの愛に苦しみ、酒と女に逃げていた頃のジャンからは想像出来ないほどの力強さ。

イレールはこの状況下でジャンを信じ任せようと思つ自分があることを心のどこかで感じていた。

「お、お父様！」

アンジェリー又は悲痛な声でロドリグを呼んだ。ロドリグも娘の存在に気づき、目を見張る。

「来てはいけない、アンジェリーヌ！」

ロドリグは自分の命も顧みず、懸命にアンジェリーヌに叫んだ。

自分が捕らわれたのはアンジェリーヌを狙ったからではないかとずっと心配していた。アンジェリーヌは宮殿でいつも周りに警護がついている身分。そう簡単に宮廷外に出られないだろうとふんできた。

だがアンジェリーヌは来てしまった。それも男装してまで。絵と自然に包まれて伸び伸びと成長したアンジェリーヌの活発な部分がかここへきて災いしてしまったのだった。

「私に構わず逃げなさい！」

「いや、お父様！」

アンジェリーヌは必死に首を振った。父を見捨てて引き返すことがアンジェリーヌにはどうしても出来なかった。

尊敬し続けてきた父親。王妃になどならなければ父親をこんなことと巻き込むことはなかったのだ。

（お父様に非はないわ。罪は私自身が受けなくてはいけないのよ）

「お前はもう自分一人の命ではない。この国を担っているのだ。それを忘れるでない！！」

「お……父様」

ロドリグの必死な説得に、アンジェリーの胸は痛んだ。

アラントルの王妃。リュシアンと共に国を背負っている立場。

（分かってる。分かってるわ。でも……）

アンジェリー又はそれでもロドリグを助けるのを止めることは出来ない。

「王后陛下、約束を守って頂き感謝しますぞ。お父上の身柄はあなた様の御身と引き換えです」

ロドリグに剣を突き付けている男とは別の、その隣にいる男が口を開いた。アンジェリー又はその男に見覚えがあった。

（あの男は確か……議員の一人、ポペール子爵だわ）

思うと同時にあと何人自分に敵意を持つ者がいるのかと考えると、アンジェリー又は背筋が冷たくなるのを感じた。ポペール子爵はきつと大勢の中の一人にすぎないと思った。

王妃になったのは間違いだったのか。しかしならなければ周りの

人々はどうなっていたか。

(私はどうすればよかったの……?)

自分の決断に迷い続けながらもアンジェリーヌは馬から降り、ゆっくり一歩一歩父とポベール子爵の許へ足を進み出す。

「アンジェリーヌ、来てはいけない!」

父の言葉を聞き入れることなく、アンジェリーヌは真っ直ぐ歩んで行く。

(私が王妃になったのが正しかったのか間違っていたのか、正直分からない。でも私の命で解決出来るなら……それでいい)

アンジェリーヌはポベール子爵の前に立った。

「父を解放して下さい」

「……いいだろう」

ポベール子爵は不適な笑みを零して言った。そして視線で隣にいる手下に合図する。

その視線につられる様にしてアンジェリーヌも隣の父を見た。瞬間瞳に飛び込んできた光景に、アンジェリーヌは目を見開き息を止めた。

父だけは助けない。アンジェリーヌの願いが目の前で砕け散る。

ロドリグに突き付けられていた剣が彼の背後から深々と突き立てられたのだ。その切っ先はロドリグの胸から突き出していた。

ロドリグは鈍い呻き声をあげ、そのままうつ伏せに倒れこんだ。

「お……父さ……」

アンジェリー又は崩れるように座り込むと、傍で倒れているロドリグに恐る恐る震える手で触れる。

何が起こったのかアンジェリー又は状況が呑み込めなかった。目の前にある光景が現実のものとは信じられなかった。

ロドリグの縛られた手が微かに動いた。彼は必死に娘を捜そうとするが、僅かに首を動かすのがやっとの状態。

「ア……ン……」

娘の名を呼ぼうとするが、声ももはや虫の音よりもか細いものだった。

アンジェリー又はロドリグが必死に何か言おうとしているのを感じ、顔を近づける。

ロドリグは出来るだけ深く息を吸い込むと、残された力を振り絞って声を発した。

「……生き……る」

それが最期だった。

絶命した父の軀を前に、アンジェリーヌは全身を振るわせ己の頭を抱え込んだ。目の前に広がる現実を拒絶するように。

「い……………いやーっ!!」

全身から放たれた悲鳴はアンジェリーヌから精神力を奪い尽くす。守りたかった者を目の前で失ったことが彼女の心を引き裂いた。

残されたのは茫然自失となった彼女の抜け殻だった。

すぐ傍で父を手にかけて男が今度は自分に刃を向けていることなど、アンジェリーヌが気づけるはずもないことだった。

* * *

「今の……………聞こえたか？」

「ああ兄上。こっちからだ。急ごうー!」

すぐ傍まで来ていたリュシアンとジャンの耳に、アンジェリーヌの絶望の叫びが届いた。

アンジェリーヌの心が涙を流している。

二人の心に彼女の泣き顔が浮かび、己の心が痛んだ。そして胸に広がる不安。

(間に合ってくれ!)

二人の祈りは同じだった。

己の何と引き換えても構わない。ただアンジェリーヌの命だけは救いたい。

二人は木々の間から洞穴の近くへ抜け出した。アンジェリーヌの声が聞こえてから時間にして1分かかったかどうか。だが二人にはその何倍も長く感じられた。

「アンジェリーヌ！」

父の亡骸を前に座り込むアンジェリーヌがその声に反応することはなかった。

二人は何が起こったのかすぐに悟る。そして今まさに起ころうとしていることも……。

ポベール子爵はリュシアンがこんな早く駆け付けてくるとは予想していなかった。しかもジャンも一緒だったことに更に驚く。ジャンはアンジェリーヌが初めて逢った時に思ったような見かけだけでなく、剣もまさに軍神と呼ぶに相応しい力の持ち主なのだ。

ポベール子爵は舌打ちした。

彼はある人物からリュシアンが来る前にアンジェリーヌを始末するように言われていた。リュシアンの暗殺は彼女を殺した後にするばいいと。決して二人を生きて会わせてはならない、二人を一度に消せばいいと思わないようにと。

ポベール子爵は知らなかったのだ、神の血のことを。ただリュシ

アンが来たり兵を連れて来た時に備え、人数だけは揃えていた。

「皆の者、あの男の命を取った者に褒美をやるぞ」

ポベール子爵はリュシアンを指さし叫んだ。

すると洞穴やその回りから雇われたならず者たちが二十人ほど姿を見せ、剣を片手に次々襲い掛かって来ようとしていた。

アンジェリーヌにはその背後から今にも剣が振り下ろされようとしている。

ほんの一瞬、リュシアンとジャンはどちらからともなく視線を合わせた。そして一斉に馬をアンジェリーヌとポベール子爵へ走らせ始めた。

まさに敵陣へ切り込んで行ったのだ。

リュシアンは馬を駆け出させると同時に神の血の力を行使させた。洞穴の側面が破壊され岩となって山積みされる。

突然響き渡った爆音に、敵は皆後ろを振り返り立ち尽くす。その隙を狙って二人は敵の間を駆け抜け抜けアンジェリーヌの許へ辿り着いた。

「アンジェリーヌしっかりしろ！ 怪我はないか!？」

馬から飛び降りたジャンは、アンジェリーヌに剣を向けていた手を下を斬り倒すと彼女に駆け寄りその肩を掴んで揺すった。

だがアンジェリーヌはまだ正気を取り戻せない。ジャンは仕方なしに軽くアンジェリーヌの頬を叩く。

「アンジェリーヌ、しっかりしろ！ アンジェリーヌー！！」

ジャンの懸命の呼び掛けに、アンジェリーヌの瞳の焦点が合う。自分を取り戻したアンジェリーヌは、瞳に飛び込んできたジャンの姿に心を爆発させた。

「ジャン……ン。お……父様が……お父様が！ ……ああーっ！！」

アンジェリーヌは叫ぶとジャンの胸に泣きついた。王妃としての、リュシアンの子としての自分など何も考えられなかった。自分を取り繕うことなど、とても出来なかった。ただ愛する人に縋りついて悲しみをぶつけることしか出来なかった。

「私のせいでお父様がっ！！」

「お前のせいじゃない。自分を責めるな！」

ジャンは精神が壊れるのではないかと思うほどの泣き声をあげるアンジェリーヌをしっかりと抱き締めた。

「何故ブランシェス男爵を殺害し、王妃の命を狙った！？」

リュシアンはポベール子爵に剣を突き付け問い詰めた。

「お前が首謀者か？」

喉元に剣を突き付けられ、ポベール子爵は冷や汗を流し唇を噛み

締める。

ジャンもアンジェリーヌを抱き締めつつも鋭い視線をポベール子爵へと向けた。

ポベール子爵は苦笑する。

「私の口を割らせたのなら、この状況を打破してからにしてみようか……陛下」

ポベール子爵に促されリュシアン達が辺りを見ると、敵がぐるぐると取り囲むようにして剣を構え今にも襲い掛かるうとしていた。

「あの者どもは陛下の命すなわち褒美を手に入れるためなら、私の命がどうなるうと関係ない連中達だ。……さあどうします、陛下？」

リュシアンは奥歯を噛み締めた。

ジャンと二人で倒せる数ではない。しかもアンジェリーヌを抱えて戦うのは困難なこと。

リュシアンは決断した。

「ジャン、アンジェリーヌには決して見せるな！」

リュシアンの言葉の意味を察知したジャンは、今もなお泣き続けるアンジェリーヌを更に強く抱き締めた。

これから起こる光景を彼女にだけは見せてはならない。ジャンは自分の体全てでアンジェリーヌを包み込んだ。

リュシアンが熱を帯びる。その後爆発音が響き渡り地鳴りがした。

神の血の力が辺りの敵すべてを地面ごと吹き飛ばしたのだ。

ほんの一瞬の出来事に、敵は自分の身に何が起こったのか知りもせず命を落としたことだろう。

ポペール子爵も目に飛び込んできた光景が現実のものとは到底信じられず、気絶寸前といったところだ。

当のリュシアンの胸には罪悪感が漂っていた。

木々の焼け焦げた匂い。

大きく抉られた大地。

肉の塊となった数十人の人々。

望んでこんなことをしたかったわけではない。

力は抑えたつもりだった。しかしアンジェリーヌとジャンを守るうとしたその思いが、思いのほか神の血の力を増幅させてしまった。

力を使うからには命を奪う覚悟はしていた。だがいざ現実を目の前にして、人の命を奪う権利が果して自分にあるのだろうかと己に問い掛けずにはいられなかった。

「兄……上？」

心配そうに掛けてきたジャンの声に、リュシアンは我に返る。リュシアンは剣を持つ手に力を入れ直し、ポベール子爵を見据えた。

「すべて話してもらおうぞ。覚悟しておくのだな」

ポベール子爵はリュシアンの視線にガツクリとうな垂れた。

我を忘れ泣いていたアンジェリー又だが、突然胸に帯びた熱と異様な雰囲気にとつとジャンの胸から頭を起こした。

「だめだ、見るな！」

瞬間ジャンは辺りの光景を見せまいとアンジェリー又を抱き締めた。

だがアンジェリー又は彼の背後に広がる光景を目にしてしまったのだった。

(今の………何?)

ここは森のはずなのに自分が来た時の風景とは大きく異なっている。

窪んだ大地。

一瞬にして劫火で焼かれた草木。

そして点々と散らばっているどす黒い塊。

(あれはもしかして……人間……なの?)

吐き気がした。現実のものとは思えなかった。

こんなことが出来るのはたった一人しか思い当たらない。

「神の血の……力……なの?」

「今は何も考えるな」

ジャンはアンジェリーヌを諭そうとした。だがアンジェリーヌは、神の血が、自分の紅の女神としての存在が急に恐ろしくなった。

たった一瞬にして人も街をもすべてを消し去ることの出来る力。その力に己も荷担している。その事実がアンジェリーヌを恐怖へと導いた。

自分の存在が恐ろしくて、アンジェリーヌは震える体でジャンにしがみついた。

「ジャン……怖い。私……怖い」

ジャンはアンジェリーヌの思いを受け止めようと彼女を優しく包み込む。

リュシアンはアンジェリーヌの受けた心の傷に、己の心を抉り取られるような痛みを感じ立ち尽した。

(13)

(お父様逃げて！……お父様　　！！)

父の断末魔。広がる血溜り。

絶命した父を前に、その両手を血に染めたアンジェリー又は悲鳴をあげた。

「アンジェリー又、……アンジェリー又！」

懸命に呼び掛ける声がアンジェリー又を現実へと引き戻す。

アンジェリー又ははっと目を覚ました。その額には冷や汗が浮かび、瞳からは涙が流れ落ちていた。呼吸も荒い。

アンジェリー又は自分がまた夢を見ていたことを悟る。

あの事件から一週間が過ぎていた。

毎夜毎夜見る悪夢。

夢の中でアンジェリー又は毎回父を惨殺され続けていた。

どうしても父を助けられない。

脳裏に焼きついた父の最期の姿がアンジェリー又に悪夢を見続けさせる。

アンジェリーヌの見た最期の父の姿。それがあの「生きる」と言い残したロドリグの姿だった。

一国の王妃の身で、下級貴族の一人に過ぎないブランシエス家の葬儀に出席することは許されなかった。それ故アンジェリーヌの心には父の死が惨い形で刻まれてしまっていた。

彼女に出来たのは宮殿内の教会で、遠くから父に祈りを捧げることだけだった。

「アンジェリーヌ」

彼女の手を両手で包み込んでいたジャンが、その片手を離し彼女の涙を拭う。

「内に溜めるな。俺には心を曝け出していいから。辛い思いは吐き出せ」

優しく語り掛けてくるジャンに、アンジェリーヌはその身を起し彼に抱き付いて声をあげ泣いた。

ジャンはアンジェリーヌを大切に包み込む。

あの事件が起こってから、毎夜ジャンはアンジェリーヌの私室で彼女に付き添っていた。

夜だけではない。

惨い事件で憔悴しきったアンジェリーヌは国務から遠ざかり、私室で一日のほとんどの時間を過ごしていた。それも病人のごとくべ

ツドに横になっていることが多かった。

リュシアンは国務をこなしながら、イレールと共に事件の首謀者の割り出しと全貌の解明に奔走している。昼夜問わず事件解明に乗り出すリュシアンは、この状況でとてもアンジェリーヌの傍で彼女を支えることが出来ない。

そこでリュシアンはジャンにずっとアンジェリーヌに付き添うよう頼んだのだった。

本来なら王妃の私室に国王以外の男性が入ることは許されない。だがこの緊急事態に、リュシアンは掟よりもアンジェリーヌの身を案じて出来るだけのことを彼女にしてやりたかった。

王妃に無理に即位させてしまった上に父親までも奪ってしまった。そのことがリュシアンに後ろめたさを感じさせていた。

そして何よりジャンが彼女にとって一番頼りになる存在と知っていたから、自分ではなくジャンを彼女の傍に置いたのだった。

彼女の世話係のジルダは、初めジャンが王妃の私室にいることに戸惑った。

ジルダはリュシアンから、ジャンとアンジェリーヌが恋人同士だったこと、王妃になったわけ、そして今回の事件のことも聞いていた。だがもし万一この二人が密通などということになってしまったら……と案じていたのだ。

だがそんな不安も二人の様子を見ているうちに不要なもの解消されていた。

心に深い傷を負ったアンジェリーヌに無償の愛を注ぐジャン。

ただアンジェリーヌを守りたい。そんなジャンの思いがジルダに痛いほど伝わっていた。

ジャンの胸の温もりに、アンジェリーヌの心が徐々に落ち着いてきた。そこへ部屋の扉が不意に開いたのだった。

アンジェリーヌはその音にはっと気づき、ジャンの胸から身を起こし扉に目を向ける。

「……陛下」

そこにはリュシアンが一人で立っていた。

アンジェリーヌはベッドから降り、リュシアンを出迎えようとする。

「そのままでもいいから」

それを見たリュシアンはアンジェリーヌを気遣い静止した。

リュシアンの優しさをアンジェリーヌは申し訳なく感じた。

自分は国務から外れジャンに甘えてしまっている。それなのにリュシアンは一人で通常の国務をこなしている上に、今回の事件の犯人追及に力を尽くしている。その上こんなにも気を遣ってくれているのに、自分は何もリュシアンにお返しをしていない……と。

リュシアンの疲労を濃く滲ませた表情を見て、アンジェリー
又はただ頭を垂れる思いだった。

リュシアンがベッドに歩み寄る。

「今日そなたの母上が来たよ」

「お母様が？」

「そう。お父上の後継者の許しを得にね。そなたに会わせなかった
が、母上は立場を重んじて辞退してしまったよ」

貴族の後継者となるには国王の許しが必要である。

「母はどんな様子でした？ 誰が後を継ぐことになりましたか？」

アンジェリー又は胸を痛めていた。夫を奪った娘を憎んでいるだ
ろうと。あれほど重んじていたブランシエス家を途絶えさせてしま
うところだったと。

「バティストという青年が養子に入って継ぐことになったよ。ロド
リグはいつ何があってもいいように遺言を残していたそうだ。そな
たに継がせることが出来なくなった後、きちんと遺言を書き直して
いたのだそうだよ」

「そう……、バティストなら安心して男爵家を任せられるわ」

彼をアンジェリー又は兄のように慕っていた。彼なら画家として
の資質も人間性も信頼出来ると思った。

「それから母上はそなたを案じていたよ。傍にはいられないがいつでもそなたのことを思っていると。離れていても娘への愛は何一つ変わらないと。きつと夫も見守ってくれているはずだとも言っていたよ」

アンジェリーヌの心に両親の姿が浮かび、その愛情に涙が溢れた。

ジャンがアンジェリーヌから離れた。アンジェリーヌはジャンと目を合わせる。

「兄上が今夜はお前を守ってくれるから」

ジャンは心細そうな眼差しを向けてくるアンジェリーヌを安心させるように微笑んだ後、リュシアンを見る。

「後は頼みます、兄上」

アンジェリーヌをリュシアンに託そうとしたジャンを、リュシアンは小さく首を振って止めた。

「今日は報告に來ただけだから。今夜も傍にはいられない。いや、しばらく今まで以上に忙しくなるだろう」

思い詰めたように顔を強張らせてリュシアンが言った。

「……報告？」

リュシアンの暗い表情にジャンは呟いたが、次の瞬間思い当たり目を見開く。

「首謀者が分かったのか!？」

その言葉にアンジェリーヌは驚きジャンを見て、本当かどうかすぐさまリュシアンに視線を注いだ。ジャンも食い入るようにリュシアンを見つめる。

リュシアンは二人の瞳を見つめ返し、深く一度息を吸うと無言で頷いた。

捜査は難航していた。ポペール子爵に命令したサンペーニュ伯爵もまた首謀者ではなく、彼は裏切らないよう家族を人質に取られていた故に口を堅く閉ざしていた。その彼がようやく吐いたのだ。

「陛下、誰なのです？ 誰が父を殺したのです!？」

アンジェリーヌの心がまだ見ぬ首謀者への憎しみに駆られた。

出来ることならこの手で敵を討ちたい。父の味わった恐怖と苦痛を少しでも敵に味あわせてやりたい。

無理なこととは知りながら、そう思わずにはいられなかった。

「今その者の許へ兵を向かわせている。敵は必ず取るから」

リュシアンの言葉はアンジェリーヌの憎しみを留めようとしていた。

リュシアンを見上げるアンジェリーヌの瞳から涙が零れ落ちた。

「教えて下さい。誰が何故父を殺したのかを。……やはり私みたい

な身分の低い者が王妃の地位に就いたことで、他の貴族の恨みをか
つたのですか？」

敵を憎み、父を死に追いやったのは己のせいと自分を責めるアン
ジェリーヌの心に、リュシアンは胸を痛める。

「アンジェリーヌ、私はそなたにまず詫びねばならない。そなたの
父を死なせてしまったのも、そなたを危険な目に遭わせてしまっ
たのも……今回の事件そのものがすべて私のせいで起こったことな
だから」

「陛下の……せい？」

アンジェリーヌのリュシアンの言葉を信じられない眩きに、リュ
シアンは頷いた。

「それでは兄上、犯人の目的はやはり？」

確認するようにジャンが言うと、リュシアンはもう一度頷き口を
開く。

「首謀者は私を亡き者にし、カミーユを王位に就けようとしていた
のだ。神の血を持つ者ではなく、本来の正当な血筋の直系に王位を
戻すために……。それでまず神の血の力を封じるために、紅の女神
であるそなたを殺そうとブランシェス男爵を利用したのだ。だから
アンジェリーヌ、そなたは何も悪くない。悪いどころか逆にそなた
も王家の継承争いに巻き込まれた犠牲者の一人なのだ。……すべて
は王家の、この私のせいなのだ。本当に済まないことをしてしまっ
た」

リュシアンはアンジェリーヌに頭を下げた。

アンジェリーヌはすぐに言葉が出てこなかった。

王妃などという身分不相応な地位に就いたから父が犠牲になってしまったのだとずっと己を責めてきた。それが違うと分かり、神の血と王家の系統のためだと知り動揺した。だが自分が紅の女神でなければ、継承争いは起こったかもしれないが、父が殺されることはなかったのだとも思った。

紅の女神だからと王妃に望まれ、心が血の涙を流すほど悲しい思いをしてジャンと別れた。それなのに神の血ではなく血統を重んじた貴族によって、今度は紅の女神だからと命を狙われた上に敬愛する父を殺されたのだ。

（私が紅の女神であるためにお父様が……。陛下は私のせいではないと言って下さったけれど、やっぱり私のせいでもあるのよ）

ロドリグの最期の姿が脳裏の蘇り、やり切れない思いでシーツを握り締めた。

「兄上、それで黒幕は誰だったのだ？」

ジャンの問いかけにリュシアンの表情が陰る。リュシアンは重々しくその口を開いた。

「……カロン又公爵だ」

ジャンはショックから目を見開き何も言えず、アンジェリーヌもまた愕然とし言葉を失った。

リュシアンは二人の、特にジャンの反応を自分の姿を映し出しているように感じながら見つめていた。

神の血を知る者が黒幕ならば、それは大臣クラスの国の中枢を担っているうちの一人だろうと覚悟はしていた。だがあまりの大物の人物に、リュシアンもまたそれを知った時、動揺せずにはいられなかったのだ。

「カロン又公爵がずっと王家の血筋の正当性を重んじ、愛人の子の私達を快く思っていなかったことはお前も感じていただろう。あの厳格な人は最後まで正当性を貫き通そうとした。やり方は間違っていたが、あの人こそ本来の王家に忠誠を示した稀に見る家臣だったのかもしれない」

王家のことを思えばこそ、その血筋の正当性を唱え続けた男。

リュシアンには彼の考えがすべて間違っていたとは言えなかった。

「兄上は公爵を許すのか？」

直系でない身で王位に就いた後ろめたさを心に抱き続けている兄リュシアンに、カロン又公爵を裁くことが出来るのかとジャンは問う。

リュシアンの表情が厳しくなった。

「カロン又公爵の考えは理解出来るが、彼が犯したのは男爵の殺害と共に王妃国王の暗殺を企てた罪。恐らく裁判でも厳しい判決が出るだろう。私も公爵には極刑を望むつもりだ」

アンジェリーヌの心は複雑だった。

父を手に掛けた者に死が与えられようとしている。敵が取れるのだ。だがそれを告げたリュシアンの辛い表情を見ると、私的感情を押さえ国王としての立場を取る彼の苦悩が、アンジェリーヌの胸に痛みを与えていた。

リュシアンが本当は極刑を望んでいないことを、彼の優しさを知るアンジェリーヌは分かっていた。しかし犯した罪の大きさに、国王として罪を許さないことは、家臣の手前避けることの出来ないものなのだ。

そして極刑が下されても、二度と父が戻ってくることはないのだと虚しさもあった。

「アンジェリーヌ、そなたには刑の執行に立ちあう権利があるが、どうするかそれまでに考えておきなさい。……恨みを晴らしたい気持ちに分からぬではないが、私としてはあまり死刑を見せたくはない。でも選ぶのはそなた自身だ。よく考えてから決めなさい」

リュシアンはそう告げると再び務めに戻って行った。

これから兵がカロルヌ公爵を捕らえ連行して来る。それに備えておかなければならなかった。

残されたジャンとアンジェリーヌはこれから起こることを想像し、重々しい雰囲気を漂わせるのだった。

裁判が行われ、予想通りカロン又公爵を始め、この事件に関わった者には極刑の判決が下された。

そしてもう一人、直接関わったわけではなく巻き込まれただけに過ぎないカミーユにも刑が言い渡された。

王族から臣下の公爵への身分の降格が下されたのだ。正当な血筋を持つカミーユの王位継承権を剥奪し、今回の事件が再び起こらないよう、大臣達が仕組んだことだった。

リュシアンは最後まで一人になっても反対し続けた。カミーユには何も罪はない。周りが勝手に持ち上げたに過ぎない……と。

だが大臣達は血筋を重んじる者が根絶やしになったわけではない、カミーユがこのままの地位にいる限り再び今回のような事件が起こるだろうと言い、カミーユの王族からの排除を国王であるリュシアンに強く進言してきた。

まだ国王としての絶対的な力のないリュシアンはそれでも反対した。もう誰も自分のために犠牲にしてはならないというリュシアンの決意がそうさせた。

しかしリュシアンの国王としての立場の脆さを知るイレールがリュシアンを説得し続け、とうとうリュシアンが折れる形で収まったのだった。

カミーユの降格が決まり、それがイレールによって本人に伝えら

れて間もなく、リュシアン自らカミーユと王太后を宮殿の一室に迎え、彼らの前に跪き頭を垂れた。

「今回のことは私の力が及ばず、こんなことになってしまい大変申し訳なく思っています。継母上には母を亡くした私達兄弟を引き取り実の子のように育てて頂いたのに、その恩を仇で返すようなことをしてしまい、どう償っていったらよいものかと思案しています。カミーユにも本来なら王位を継いだのはそなたなのに、王位を奪った上に王族から追い出すことになってしまっ……」

リュシアンは己の無力さが悔しくて思わず泣きそうになり言葉に詰まった。それを堪えるように唇を噛み締める。

「陛下、顔を上げて下さい。私達はあなたを責めるつもりはありません。責めるとすれば理由はどうあれ王族に刃を向けた者に対してでしょう。神の血を持つ者が王位を継ぐ。それが国の定めた決まりなら、それに従うのが王家の務め。ですから陛下は何も後ろめたさを感じることはないのです。堂々と国王として立っていればよいのです。その器量が陛下にはおありなのですから」

「継母……上」

逆に励ましの言葉を受けたリュシアンは、幼い頃から与えてくれていた母の愛情を感じ、ただただ自分を許してくれた王太后に感謝した。

「兄上、私はこうなって正直心のどこかでホッとしています。私には国王としての器がありません。貴族になればその柵から解放されるのです。ただたとえ貴族になったとしても、兄上を今までと同じように兄として慕うことは許して下さい」

心優しいカミーユの言葉にリュシアンは胸が一杯になった。

「身分が異なっても、私はそなたの兄であることに変わらない。私
といつまでも兄弟でいて欲しい」

リュシアンは心に刻む。

この母子を二度と災いに巻き込んだりはしない。守っていくこと
が償いなのだ。

* * *

カロン又公爵の処刑の日が訪れた。

広場には貴族を始め民衆も多数集まっている。そして騒動が起こ
らないように兵士も多く配置されていた。

その中でリュシアンとアンジェリーヌとイレールは、王家の所有
する屋敷の広場に面したバルコニーにいて、その様子を見下ろして
いた。

ジャンだけは下の断頭台の近くでカロン又公爵が連れて来られる
のを待っている。カロン又公爵の身分を考え、ジャンが彼の最期に
残す言葉を聞く役目を担ったのだ。

「アンジェリーヌ、本当に見届ける覚悟出来ているか？ 人の死に
様を見るのは決して気分のいいものではない。また悪夢にうなされ
てしまうかもしれない。それでもよいか？」

リュシアンは最後にもう一度確認する。どれほど悪夢にうなれて涙を流し苦しんでいたか、リュシアンもよく分かっていた。

彼の心遣いがアンジェリーヌの胸に染みだ。

人の死を見届けるのは正直いって怖かった。見届けたからといって恨みが晴れるわけでもない。それでも避けて通ることは出来ないものだと感じていた。

「はい。私に出来ることは父の代わりにこの事件のすべてを見届けること。それが私に出来るせめてもの父への償いなのです。それで私が苦しむことになっても、それは私に与えられた試練。それに公爵が処刑されようとしているのに、王妃の私が立ち合わないわけにはいきません。この処刑は国にとっても重大な出来事なのですから、王家としても立ち合うことで公爵に敬意を表すべきと思いますから……」

「国の……私の立場を思つてのことなら無理することはないのだよ。私はこれ以上そなたを苦しめたくはない」

ジャンとのこと、父親のこと。……愛する人を泣かせてばかりいる後悔がリュシアンの胸を苛んでいた。

「陛下のお気遣い、嬉しく思います。けれどたとえ苦しんだとしても、それは決して陛下のせいではありません。私自身が選んだことなのです。ですから陛下も己を責めるのはどうかおやめ下さい」

恐れを抱きながらも耐え抜こうとするアンジェリーヌの健気な姿がリュシアンの胸を打つ。

たとえ少しでも支えになることが出来るのなら、他の何を犠牲にしても支えになってやりたいと思った。そうすることで己の悔んでも悔みきれないやり場のない思いが、僅かでも救われる気がした。

「アンジェリーヌ、私に出来ることがあつたら遠慮せず頼って欲しい。私はそなたの力になりたい。ジャンの代わりに今は私がそなたを支えてやりたいのだ」

リュシアンは切実に訴える瞳に、アンジェリーヌの心を一瞬切ない苦しみが駆け抜けた。

（陛下は心の底から私を心配してくれている。……愛してくれている）

リュシアンは包み込む温かな愛を感じたアンジェリーヌは、この人のためにジャンのことを忘れようと思いはじめていた。

そうすることがリュシアンにとってもジャンにとっても自分にとっても……そしてこの国にとっても、一番よい選択なのだを受け入れようとしていた。

広場が一際ざわめき、そしてどよめきに変わった。

カロンヌ公爵が広場に連れて来られたのだ。

彼は広場の中央に設置された断頭台に向かって毅然とその足を進めている。後ろ手に縛られてなお臆することなく、真っ直ぐ先を見据えるカロンヌ公爵の姿に、アンジェリーヌは動揺した。

（あの人がお父様を殺した……首謀者）

ジャンに逢うこともなく王家に嫁ぐこともなければ、恐らく名前しか知らなかったであろう大貴族の筆頭人物。

顔を会わせたのも言葉を交わしたのも数えるほどでしかなかった。それでも会ったたびに、彼の威圧感に胸に重苦しいものを感じていた。

（あの男が……）

彼を殺して父が戻ってくるのなら自分の手が血に塗れても構わない。そう思うほどアンジェリー又の心に憎しみが湧き上がった。

それなのにアンジェリー又は彼に憎しみをぶつけることが出来なかった。

憎い。だが彼のその堂々とした姿に、彼の信念までもが伝わってくる。

国王には正当な血筋の者を。

やり方は間違っていた。しかし他人の命を奪ってまでもその信念を貫こうとしたカロン又公爵の確固たる決断を、アンジェリー又は責めることが出来そうになかった。

自分にはそんな決意も強い心もない。いつも守られて支えられて……そして逃げていた。己の弱い心で、どうしてあのカロン又公爵に立ち向かって彼を罵倒することが出来ようか。

カロン又公爵の存在はアンジェリー又に自分の心を見つめさせた。

アンジェリーヌが葛藤している間に、カロンヌ公爵は断頭台へと上がっていった。

彼の傍にジャンが歩み寄り声を掛ける。彼の遺言を聞くためだ。

カロンヌ公爵は顔色一つ変えることなくジャンに二言三言何かを伝え、ジャンに背を向け断頭台の前に立った。

その姿は後悔などない、事をやり終えた満足感さえ漂わせていた。

一方ジャンはどこか落ち着かない、動揺しているような表情を出していた。

(どうしたのジャン？ カロンヌ公爵は何と言ったの？)

ジャンを動揺させたカロンヌ公爵の言葉に、アンジェリーヌの心もざわつく。

(お父様のこと？ 私のこと？ ……それとも陛下のこと？)

気になってしまう。今すぐにも駆け寄って聞き出したかった。しかしこの場を離れるわけにはいかなかった。

「アンジェリーヌ、大丈夫か？ 見届けられるか？」

リュシアンという言葉にアンジェリーヌは我に返り、カロンヌ公爵を見下ろす。

彼はすでに頭を垂れ、台に首を固定されている。後は鋭い刃が彼の首に落とされるばかりだ。

アンジェリーヌの脳裏に刃が振り落とされる瞬間の想像が浮かんだ。

人間の死。

血に塗れるその姿を想像したとたん、アンジェリーヌの心に父の死の衝撃が蘇る。呑み込まれそうになる思いに、手を握り合わせ懸命に耐えた。

その恐れに震える手に重ねられた温もり。

リュシアンの手だった。

無闇に触れないと言ったリュシアンが私的にアンジェリーヌに触れたのは、一体何日前のことだったろう。それは思い出せないほど前のことだった。

アンジェリーヌは縋りつく思いでリュシアンを見つめた。

「そなたはよく頑張った。……もう無理をせずともよい」

優しく語り掛けるリュシアン。

彼の言葉に、アンジェリーヌは彼に支えられている自分がいることを悟った。いつも一歩後ろから背中を見つめ、必要な時はその手を差し出してきてくれたのだと。

そして今もまたアンジェリーヌはリュシアンによって己の歩みた先へ踏み出す力を与えられたのだった。

「陛下、……最後まで私はここにいます」

「……………そうか」

アンジェリーヌの決意にリュシアンは穏やかに言った。

アンジェリーヌはリュシアンの手から力を貰い、カロンヌ公爵へと真っ直ぐ視線を下ろした。

刃が振り落とされたのはその直後のことだった。

弔いの鐘を聞きながら、アンジェリーヌは人の命の儚さを噛み締めるのだった。

* * *

カロンヌ公爵の事件から、ようやく平穏を取り戻しつつあった。

夕食後、執務室へとジャンがやって来た。

「兄上、いえ陛下。大切なお願いがあります」

こんな時間にやって来ただけでなく、ジャンから今まで一度も呼ばれたことのない陛下という敬称で呼ばれ、リュシアンはジャンの顔を不思議そうに見た。

ジャンの表情はいつになく真剣で、何かを内に秘めている感じをリュシアンは受けた。

「陛下、では私はこれで……」

異様な雰囲気イレルが気を遣い退出しようとする。

「待てイレル。お前にも聞いてもらいたい」

ジャンが引き留める。

リュシアンは机の上で手を組み、目の前に立つジャンを見上げた。ジャンの願い事がよほど重大なことなのだと思われ、肌で感じ取っていた。

「頼みとは何だ？」

ジャンはリュシアンの声から自分が自分の真剣さをどことなく感じとって今向き合ってくれているのだと知り、決意を口にする。

「俺を王族から外し公爵へ降して欲しい」

リュシアンは予想もしていなかった言葉を聞き思わず立ち上がった。が、すぐには言葉が出てこない。そんな驚きを隠せないリュシアンにジャンはもう一度言う。

「俺を貴族に……臣下にして欲しい」

「……なぜ急に……そんなことを？」

「この前の事件がきっかけといえはきつかけだが……。よく考えて決めたことだ」

「そんなこと認められない。私にはお前が必要だ」

リュシアンの声は動揺で上擦っていた。ジャンを失うことの大きさを分かっているからこそ、その衝撃は大きかった。

「俺も陛下の片腕になりたいとずっと思ってきた」

「では何故？ 私を助けてはくれないのか？ 私の頼りなさに呆れてしまったからか？」

「呆れたことなんてない。片腕になれなくなったのは本当に済まないと思っている。けれどもこれが陛下にとっても俺にとっても最善のことだと思ったから決めたんだ」

リュシアンの中の混乱し、とてもまともに考えられなくなっていた。急にこんなことを言い出したジャンの心理を掴めなくて、どう説得して思い留まらせたらいいのか分からなくなっていた。

「ジャン殿下、それはこの間のカロン又公爵の言葉と何か関係があるのではないですか？」

そんなリュシアンの様子を助けるように、イレールが口を挟んできた。

イレールの言葉にジャンは一瞬躊躇ったが、すべてをはっきりさせないと認めてはもらえないと思い頷いた。

「あの時カロン又公爵は言ったんだ。俺の存在が兄上を追い詰めるだろうと」

「私を追い詰める？」

「ああ。兄上と俺は同時に産まれた兄弟。神の血のことを知らない貴族にとつたら、カミーユがいない今となつては兄上と俺、どちらも王位を継ぐ権利が同じようにあると思うだろう。カミーユの時のように己の感知しないところで勝手に貴族が兄上を排除しようとするかもしれない。貴族が真つ二つに分かれ、それはやがて兄弟の対立へと繋がってしまう。そうなればまた兄上もアンジェリーヌも苦しむだろう。それにカロンヌ公爵はこうも言ったよ。俺のアンジェリーヌへの想いがやがて兄上への憎しみとなり、彼女を手に入れるためなら王位をも望むようになるだろうと。俺は反逆者になどなりたくはない。兄上を憎みたくも追い詰めることもしたくない。俺は王位継承権を放棄することで、兄上もアンジェリーヌも守ろうと決心したんだ。だから兄上、どうか俺の願いを聞いてくれ。俺に王子としての最後の役目を果たさせてくれ」

処刑の日から今日まで考えに考え抜いた結論。カロンヌ公爵の言葉を鵜呑みにしたわけではない。自分たち兄弟の立場の危うさが分かっているからこそ決心したことだった。

ジャンの決意の固さを感じてもなお、リュシアンはすぐにそれを受け入れられなかった。

「アンジェリーヌのことはどうするのだ？ お前が王族でなくなつてしまったら、お前とアンジェリーヌを結婚させることが出来なくなってしまうのではないか！ 私は彼女と約束したのだ。いつかきつとお前の許へ返すと……」

リュシアンの言葉でジャンの胸にアンジェリーヌへの想いが込み上げる。ジャンは目を伏せた。

自分の一生を懸けて愛し抜こうと決めた女性。貴族に降ることは結婚するどころかも二度と彼女の傍で彼女を見守ることも出来なくなるということ。彼女が苦しみ涙を流していても手を差し伸べることも出来なくなるということ。

それを考えると胸が痛む。しかしジャンは彼女を救える人物がもう一人いることを知っていた。

ジャンはリュシアンの隣に歩み寄り、肩に手を置いた。

「兄上、アンジェリーヌのことを頼む」

リュシアンは目を見開いた。ジャンがアンジェリーヌを諦めたと言口にしたからだ。リュシアンは驚きを隠せないまま愕然と首を横に振った。

「兄上にしか頼めないことだ」

「無理だ。……アンジェリーヌを幸せに出来るのはお前だけなのだぞ」

「そんなことはない。兄上の想いが彼女を幸せに出来るさ」

ジャンが本気でアンジェリーヌを手放す覚悟を決めている。その上自分に託そうとしている。

リュシアンはジャンを思い留めさせる術をすべてなくした。

「それでは兄上、手続きが出来たら俺に教えてくれ」

ジャンはリュシアンから離れ退出しようとする。扉に向かう。扉を開ける手をふと止め、もう一度リュシアンを見た。

「兄上、……アンジェリーヌと幸せにな」

想いを押し殺し微笑んで言うと、ジャンは部屋を出て行った。

リュシアンは額に手を当て崩れるように椅子に座り込んだ。

「……イレール教えてくれ。どうすればジャンを思い留まらせることが出来る？」

部屋の隅で事の成り行きを見守っていたイレールがリュシアンに近寄る。

イレールもジャンの突然の行動に驚いていた。あの心そのままに生きてきたジャンが、己の想いを封印し、国と兄と恋人を守るために身を引いたのだ。ジャンの成長を、イレールは頼もしくさえ感じていた。

「ジャン殿下はご自分の立場を痛感したのでしょう。自分は諸刃の剣だと」

「……諸刃の剣？」

「はい。陛下を守り手助け出来る一方で、陛下の脅威となる唯一の存在だと悟ったのです。ですから身を引いたのです。陛下と王后陛下を守るために……」

リュシアンはイレールが何を言おうとしているのかを悟り、悲痛

に満ちた表情を浮かべ彼を見つめる。イレールはリュシアンの胸の内を知って頷いた。

「ジャン殿下は自らの取るべき道を選んだのです。もう止める術は……「ごぞいません」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1471v/>

紅の女神～二つの愛に生きて～

2011年11月22日23時54分発行